井相田C遺跡7

—井相田C遺跡第8次調査報告—

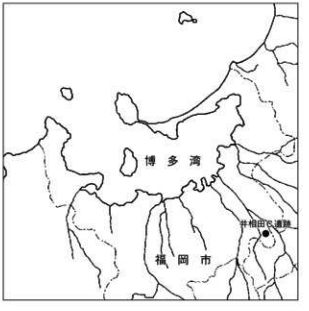
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1027集

2009

福岡市教育委員会

井相田C遺跡7

—井相田C遺跡第8次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1027集



調査番号　0703
遺跡略号　ISC－8

2009

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところです。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、博多区井相田２丁目地内における共同住宅の建設に先だって行われた井相田Ｃ遺跡第８次調査の成果の報告書です。

本調査では、弥生時代から古代にいたる集落跡や水路を検出しました。特に、溝状遺構で区画される古墳時代から飛鳥時代の集落跡は、当時の有力階層の屋敷地の一部である可能性があり、地域の歴史を考える上で注目されるものです。今後の周辺調査によるさらなる検討が待たれます。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂きましたら幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施についてご理解をいただき、調査費用の負担をはじめとする多大なご協力を賜った村田千恵子氏をはじめとする関係各位の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、平成19（2007）年4月16日から同年5月29日まで発掘調査を実施した、共同住宅の建設に伴う井相田Ｃ遺跡第８次調査の報告書である。なお、個人による事業を原因とする調査であるため、発掘調査費用の一部について国庫補助金を適用している。
2．遺構の呼称は記号化し、構列・ピット列をSA、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土坑をSK、性格不明遺構および土器溜をSX、柱穴および性格不明のピットをSPとしている。また遺構番号は、調査時における番号をもとに一部整理し、修正して報告している。
3．本書の遺構実測図に用いる方位北は磁北である。調査区の座標は任意である。標高は、道路台帳地図に記された周囲の道路面上のレベルから移動している。近隣周囲に国土座標杭が見当らなかったため、調査対象地を平面測量し、道路台帳地図に合わせることで調査区の位置を地図上にはめ込んでいる（Fig2）。
4．本書に用いる遺構実測図は、主に久住猛雄（埋蔵文化財第１課）が作成し、浦仲英、大庭智子、尊田絹代、中村尚美（以上、発掘作業員）の助力を得た。遺構実測図の製図は、坂井かおり、成清直子（以上、整理作業員）が行った。
5．本書に用いる遺物実測図の作成者は以下の通りである。土器は小嶋篤（福岡大学大学院）、三阪一徳（九州大学大学院）、山崎悠郁子（別府大学学生）が主に実測を行い、久住が修正・補足した。土器の拓本採取は宇野美嘉、坂井、成清（以上、整理作業員）が行った。木製品は比佐陽一郎（文化財整備課）が実測した。以上の遺物実測図の製図は坂井、成清、および夏木大吾（福岡大学学生）が行い、久住が補足した。石器・石製品は板倉有大（埋蔵文化財第２課）が実測および製図を行った。また、Fig.32の砥石のみ夏木が実測・製図を行った。
6．本書に用いる遺構写真および遺物写真は久住が撮影した。使用した写真には、35mmカメラおよび６×７判カメラによる白黒フィルム写真と、デジタル１眼レフカメラによるデータ画像の両者がある。
7．本書の編集は久住が行った。また執筆は、石器類に関する記述は板倉が行ったが、他は久住によるものである。
8．本調査に関わる出土遺物と記録類は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

目　次

本文目次

Ⅰ．はじめに…… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．遺跡の立地と歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の記録…… 9
　1．調査地点の位置と基本層序 …… 9
　2．調査の経過と概要 …… 10
　3．検出した遺構と遺物 …… 10
　（1）溝状遺構 …… 10
　（2）土坑 …… 16
　（3）柱穴列 …… 22
　（4）包含層の出土遺物 …… 25
　（5）石器・石製品 …… 28
表1．溝 SD002，SD010・011，SD091 土層注記 … 8
表2．溝 SD014，SK005 ほか土坑・柱穴土層注記… 13
Ⅲ．まとめ…… 28

挿図目次

Fig.1　井相田C遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）… 1
Fig.2　井相田C 8次調査地点位置図（1/1,000）… 2
Fig.3　井相田C 8次調査区全体略図（1/200）…… 4
Fig.4　井相田C 8次全体遺構平面図（1/100）…… 5
Fig.5　調査区壁面土層柱状図（1/40）…… 6
Fig.6　SD002 ～ 004，SD010・011 土層図・断面図 7
Fig.7　SD091，SD014 土層図・断面図（1/40）…… 9
Fig.8　SD010・011 －Ⅱ区遺物出土状況図（1/30） 10
Fig.9　SD010 －Ⅰ区遺物出土状況図（1/30） …… 10
Fig.10　SD010 －Ⅰ区西，SK028 遺物出土状況図 … 11
Fig.11　SD014，SK096・097 遺物出土状況図…… 11
Fig.12　SD002・004，SD011 出土土器（1/4）…… 12
Fig.13　SD010・011，SD014 出土土器（1/4）…… 12
Fig.14　SD015・016 実測図（1/40）…… 14
Fig.15　SK005 実測図・土層図（1/40）…… 15
Fig.16　SK005 出土土器（1）（1/4）…… 16
Fig.17　SK005 出土土器（2）（1/4）…… 17
Fig.18　SK005 出土木製品（1/4，1/3，1/2）…… 18
Fig.19　SK008・080 実測図（1/50）…… 19
Fig.20　SK099・101，SD091 遺物出土状況図…… 19
Fig.21　SK006・007・028・099 出土土器（1/4）‥‥19
Fig.22　SK097・096・101 出土土器（1/4）…… 20
Fig.23　SP024，SX012，SK092・093，SK007，SK022・023 実測図（1/40）…… 20
Fig.24　土坑・柱穴出土弥生土器（1/4）…… 21
Fig.25　柵列 SA01 ～ 05（1/60）…… 22
Fig.26　SA06（門柱？）実測図（1/40）…… 23
Fig.27　包含層出土土器（1）…… 23
Fig.28　包含層出土土器（2）（1/4）…… 24
Fig.29　SD010・011，SD014，SD091 出土土器 …… 25
Fig.30　包含層出土弥生土器（1/4）…… 26
Fig.31　井相田C 8次出土石器・石製品 …… 27
Fig.32　SK005 出土砥石実測図 …… 28

本文中写真（Ph.）目次

Ph. 1　調査区壁面土層A（北西から）…… 6
Ph. 2　Ⅱ区作業状況（南から）…… 6
Ph. 3　SD002・003・004（西から）…… 9
Ph. 4　SD010・Ⅱ区遺物出土状況（東から）…… 10
Ph. 5　SD010・Ⅱ区遺物出土状況（南から）…… 10
Ph. 6　SK028，SD010・Ⅰ区遺物出土状況（西から）11
Ph. 7　SD014・091，SK096・097 検出状況 …… 12
Ph. 8　SD091，SK099・101 遺物出土状況…… 13
Ph. 9　SK101・099 遺物出土状況（南東から）…… 27
表表紙写真　SK005 中層遺物出土状況（東から）

図版目次

PL. 1（カラー）
1．井相田C 8次Ⅰ区全景（南西から）
2．井相田C 8次Ⅱ区全景（北東から）
3．Ⅰ区北半調査状況（南西から）

PL. 2（カラー）
1．SK005 土層（東から）
2．SK005 中層遺物出土状況（東から）
3．SK005 下層遺物出土状況（北東から）
4．SD010 北側遺物出土状況・土層J（西から）
5．SD010・011 土層F（東から）
6．SD010・011 土層H（東から）
7 ～ 10．出土遺物写真（番号は Fig. に対応）

PL. 3
1．Ⅰ区 SD011・010，SD002 ほか掘削状況（西から）
2．Ⅰ区 SD011・010 掘削状況（北から）

PL. 4
1．SK005 中層遺物出土状況（西から）
2．SK005 下層遺物出土状況（東から）
3．Ⅰ区 SD010・011 掘削状況（東から）
4．Ⅱ区全景（南西から）

PL. 5
1．SD011・Ⅱ区掘削状況（東から）
2．SK028 遺物出土状況（北東から）
3．SK005 完掘状況（東から）
4．SK093 遺物出土状況（南から）
5．SK022・023 土層（北から）
6．SD011 土層G（東から）
7．SD014・091，SK096・097・099・101 遺物出土状況
8．SD014，SK096・097 遺物出土状況（南西から）

PL. 6
1．SD014 遺物（13 ～ 10）出土状況（東から）
2．SD014 土層（西から）
3．SD091 土層M（東から）
4 ～ 14．出土遺物写真

PL. 7
1 ～ 23．出土遺物写真

PL. 8
1 ～ 17．出土遺物写真

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成19（2007）年2月8日付で、村田千恵子氏より、博多区井相田2丁目17番地における共同住宅建設工事について、文化財保護法に基づく事前審査申請書が福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に提出された（事前審査番号18－2－947）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である井相田C遺跡（分布地図番号12－2630）に含まれており、周辺における発掘調査や試掘調査の成果から、埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断され、予定される工事内容はこれに影響を及ぼすことが懸念された。したがって申請者に対し、申請地における埋蔵文化財の有無を確認するための予備調査の実施を要請した。これを受け、申請者側との協議が行われ、平成19年2月21日に確認調査を行うことになった。

確認調査の結果、共同住宅建設予定範囲内の試掘トレンチにおいて、地表下－120cmで遺物包含層を確認し、さらに－140cm前後において古墳時代の遺物を含む溝状遺構を確認した。この確認調査の結果を受け、埋蔵文化財第1課と申請者側の間で協議を行い、記録保存のための発掘調査を行うことで合意を得た。平成19年3月28日付けで、村田千恵子氏を委託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が福岡市教育委員会との間で締結され、平成19年4月16日から同年6月1日に本調査を行い、平成20年度に整理・報告を行うことになった。また本事業は村田千恵子氏の個人事業であるため、埋蔵文化財第1課における国庫補助金適用要項に基づき、調査費用の一部については国庫補助金を適用することになった。

申請地における本調査は、平成19年4月16日より開始し、同年5月28日に終了した。整理作業は平成20年度に行い、報告書は同年度末に刊行することになった。

2．調査の組織（平成19年度は本調査年度、平成20年度は整理・報告年度）

調査委託　村田千恵子　　**調査主体**　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

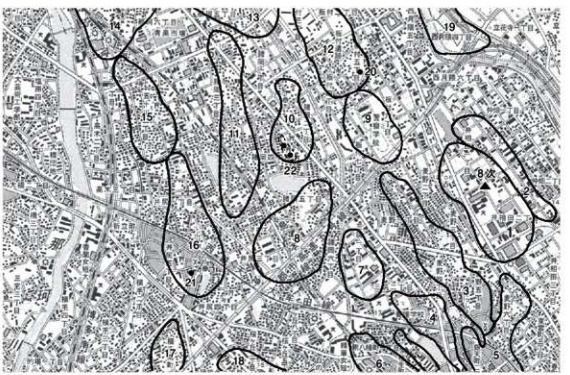


Fig. 1　井相田C遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）

1. 井相田C遺跡　2. 仲島遺跡　3. 麦野A遺跡　4. 麦野C遺跡　5. 麦野B遺跡　6. 南八幡遺跡
7. 三筑遺跡　8. 笹原遺跡　9. 高畑遺跡　10. 諸岡A遺跡　11. 諸岡B遺跡　12. 板付遺跡
13. 那珂君休遺跡　14. 那珂遺跡群　15. 五十川遺跡　16. 井尻B遺跡　17. 寺島遺跡　18. 須玖岡本遺跡群
19. 立花寺B遺跡　20. 板付八幡古墳　21. 井尻B1号墳　22. 諸岡古墳群

（※太線は遺跡の分布推定範囲であるが、おおよその範囲を示したものであり、図には表示していない遺跡もある。埋蔵文化財事前審査における埋蔵文化財包蔵地の範囲は変動することもあり、注意されたい。）

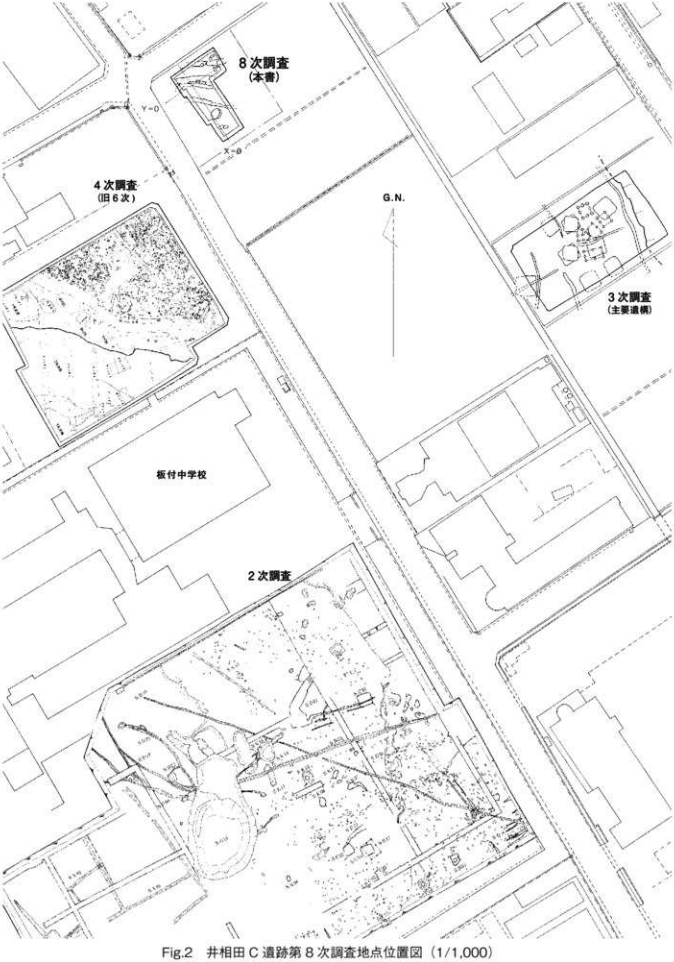


Fig.2　井相田C遺跡第8次調査地点位置図（1/1,000）

調査総括　埋蔵文化財第１課長　山口譲治　　埋蔵文化財第１課調査係長　米倉秀紀
調査庶務　文化財管理課管理係　鈴木由喜（平成19年度）、古賀とも子（平成20年度）
事前審査　埋蔵文化財第１課事前審査係　上角智希（平成19年度）、藏冨士寛（平成20年度）
調査担当　埋蔵文化財第１課調査係　久住猛雄

本調査においては、多くの発掘作業員の方々の協力を得た。整理作業は、担当者の指示のもと、宇野美嘉、坂井かおり、成清直子が行った。遺物のうち土器の実測は、担当者の指導のもと、三阪一徳（九州大学大学院）、小嶋篤（福岡大学大学院）、山崎悠郁子（別府大学学生）、が行い、一部を久住が修正・補足した。石器・石製品については、実測および石器群全体の観察と原稿執筆は板倉有大（埋蔵文化財第２課）が行った。木製品の実測は比佐陽一郎（文化財整備課）が行い、観察所見についてご教示を得た。本調査中は、調査地が福岡市埋蔵文化財センターの隣接地であったこともあり、同センター職員から様々なご協力を得た。最後に、本調査に至る協議・契約および条件整備などについて、委託者である村田千恵子氏、および仲介者である上村建設株式会社南支店の担当者の方の深いご理解とご協力を得た。これら関係各位の方々に対し、特に記して感謝申し上げたい。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

井相田Ｃ遺跡は、福岡市博多区の最南端に位置し、大野城市と境を接する（Fig.1）。地形的には福岡平野の中央東側を博多湾に向かって流れる御笠川の左岸に位置する。周囲は御笠川によって形成された沖積地であるが、その間には沖積微高地が帯状に点在し、そこに遺跡が立地している。おそらく中世ないし近世以降に一帯が広く水田開発され、近年まで水田が多く存在したが、現在は多くが埋め立てられて平坦地化しつつある。御笠川と井相田Ｃ遺跡を挟んだ西側には、那珂古川があり、これは古くには幅の広い旧河道であったが、埋没して今は水路を残すのみとなっている。井相田Ｃ遺跡はこの那珂古川と御笠川の間に立地している。この間には、さらに幾つかの旧流路が存在した痕跡があるが、井相田Ｃ遺跡の東縁から北縁に推定される旧流路を挟んだ東～北側には、仲島遺跡が分布する。井相田Ｃ遺跡と仲島遺跡は、かつて遺跡範囲や調査次数についての混乱があったが、現在は整理されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第658集参照）。仲島遺跡は、福岡市博多区と大野城市にまたがり、両市で調査されている。弥生時代中期から奈良時代、および中世前半期の遺構と遺物がある。中国古代の貨布や後漢鏡片、青銅製鋤先、銅矛鋳型など弥生時代の比較的稀少な遺物が出土しているほか、滑石製模造品や人面墨書土器などの古墳時代後期～古代の祭祀関連遺物も出土し注目される。

井相田Ｃ遺跡とは那珂古川を挟んだ西側の中位段丘上には、麦野Ａ遺跡が立地する。古代・中世の集落遺跡であるが、弥生時代前期後半～末の貯蔵穴群も検出されている（18次）。８次調査では、付近を通る古代官道（山陽道、水城西門ルート）の方位に直交する区画溝と方形柱穴列があり、８世紀中頃～末頃の官衙遺構の一部と考えられる（福岡市867集）。麦野Ａから南方に連なる八ツ手状の段丘には、麦野Ｂ、麦野Ｃ、南八幡、雑餉隈遺跡が連続して分布する。麦野Ａを含むこれらの遺跡群は、弥生時代～飛鳥時代の集落は断続的に存在するが散漫な分布であるのに対し、奈良時代から平安時代初頭（８～９世紀前半）のみ全域に集落が分布し、その後消長する。集住の契機は８世紀前半における官道の造営が推定されるが、竪穴住居群のピークは８世紀後半であり、その歴史的背景が課題である。

官道は、福岡市内では井相田Ｃ遺跡の西端を抜け（１次調査で平行する溝を検出）、高畑遺跡、板付遺跡、那珂君休遺跡、那珂遺跡群、比恵遺跡群と西北方向に直線的に走行することが推定されているが、各遺跡の推定線上で切り通しや側溝が確認されている。高畑遺跡は、この官道推定線の周辺で多量の瓦類が出土しており、「高畑廃寺」ともされるが、山陽道の駅家には瓦を葺くことが多く、寺院ではなく駅家を中心とした官衙遺構が展開していた可能性もある。墨書土器や木簡も多く、人面墨

書土器や木製人形・絵馬などが出土することから、大宰府に入る直前の駅家において祓いを主目的とする祭祀が行われたことが考えられる。なお、市内における水城西門ルートの官道については、高畑18次の報告に詳しい（福岡市699集）。最近の高畑の調査でも官道の延長部分がさらに確認されている。

高畑遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期・中期の集落が継続的に展開する。滑石製玉作工房や陶質土器が出土し、周囲での古墳時代中期の集落が比較的少ない中では、中心的な集落である可能性がある。高畑の北側には板付遺跡があり、弥生時代早期以来の弥生時代全期間の農耕集落が展開し、古墳時代には集落が断続的に展開する。板付八幡古墳は石室下部が露出し、墳丘は残骸しかないが、径30ｍ前後の大型墳であり、残丘の形状から前方後円墳の可能性もある（福岡市717集）。採集された須恵器と石室形態から、６世紀末における首長墓であろう。諸岡古墳群は、「諸岡型貝輪」が出土した甕棺墓地（諸岡Ｂ遺跡）が展開した丘陵上に築造されるが、このうち丘陵頂部の３号墳は円筒埴輪が採集されており、神社により削平された墳丘裾部ラインの観察からは前方後円墳であった可能性がある。もし前方後円墳であれば全長30ｍ強が想定され、埴輪から６世紀初頭～前半の首長墓と推定される。この北の丘陵尾根下方にある諸岡２号墳は、立地から７世紀前半代のものと推察されるが、23ｍ前後の径があり、その時期としては大型墳であり首長墓級である。また弥生時代中期から古墳時代前期前半の大集落である井尻Ｂ遺跡には、集落衰退の後に井尻Ｂ１号墳が築かれている。埴輪や須恵器の型式から５世紀中頃前後と考えられ、径19ｍを測る。井尻Ｂはその後、飛鳥時代末期（７世紀末）に再び集落が展開し、８世紀初頭までの短期間、多量の瓦が出土する「井尻廃寺」を中心とした正方位に区画・配置された官衙遺構群が存在したことが判明しつつある（福岡市787集・923集）。

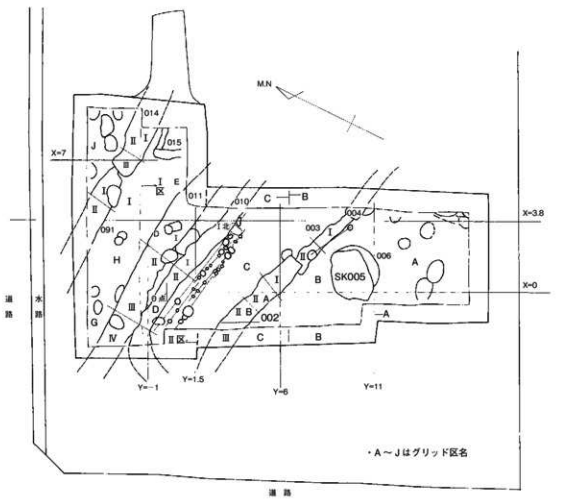


Fig.3　井相田Ｃ遺跡８次調査区全体略図（S=1/200）

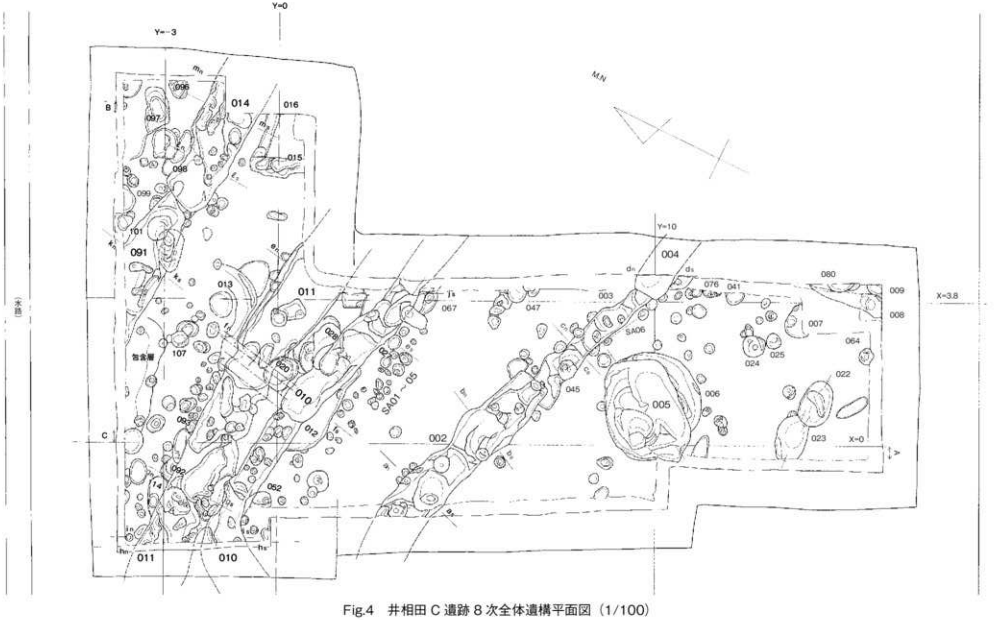


Fig.4　井相田 C 遺跡 8 次全体遺構平面図（1/100）

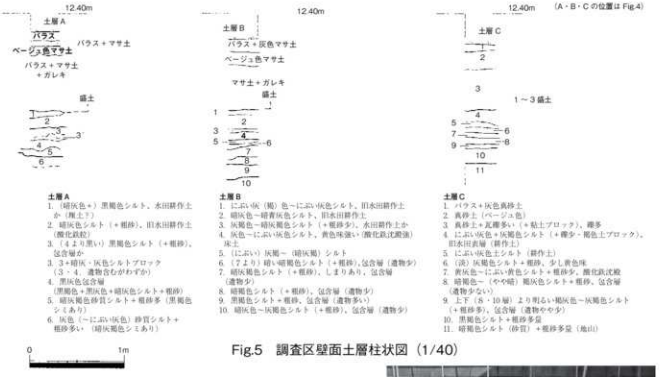


Fig.5　調査区壁面土層柱状図（1/40）

井尻Ｂは一時期の評（郡）衙の可能性がある。井尻Ｂの北方には、五十川遺跡、那珂遺跡群が続く。那珂遺跡群は、北に連続する比恵遺跡群とともに弥生時代から古墳時代前期中頃までの巨大集落であるが、前期後半から中期の遺構は非常に少ない。中期末に剣塚北古墳が築かれる頃、集落の再形成が始まり、6 世紀中頃（TK10）の東光寺剣塚古墳の築造より集落が大型化する。6 世紀後半には「那津官家」とされる比恵 8･72 次の倉庫群が出現し、6 世紀末以降には那珂遺跡群の各所で官衙的遺構群が展開するが（115 次、23・114 次、37・52・117 次など）、7 世紀代の初期瓦の出土が多いことが異例である。これらは、『日本書紀』にある「筑紫大宰」や「長津宮」に関連する遺構が含まれる可能性を秘めており、その解明は今後の課題である。

井相田Ｃ遺跡の北方、御笠川の対岸の川沿いには立花寺Ｂ遺跡がある。その最南部の 6 次調査において古墳時代中期後半（TK208）から後期初頭（MT15）の住居群が密集して検出され、大量の土器群が出土した（第 702 集）。子持勾玉 5 点やミニチュア土器など、水辺の祭祀を示す遺物群がある。この時期のまとまった集落は福岡平野内では数少ないものである。

Ph1.　調査区壁面土層 A（北西から）

Ph2.　Ⅱ区作業状況（南から）

以上、井相田Ｃ遺跡周辺の遺跡について、主に古墳時代から奈良時代に焦点を当てて概観した。その他の時代を含む歴史的環境については、井相田Ｃ３次の報告に詳しく、参照されたい（福岡市 658 集）。

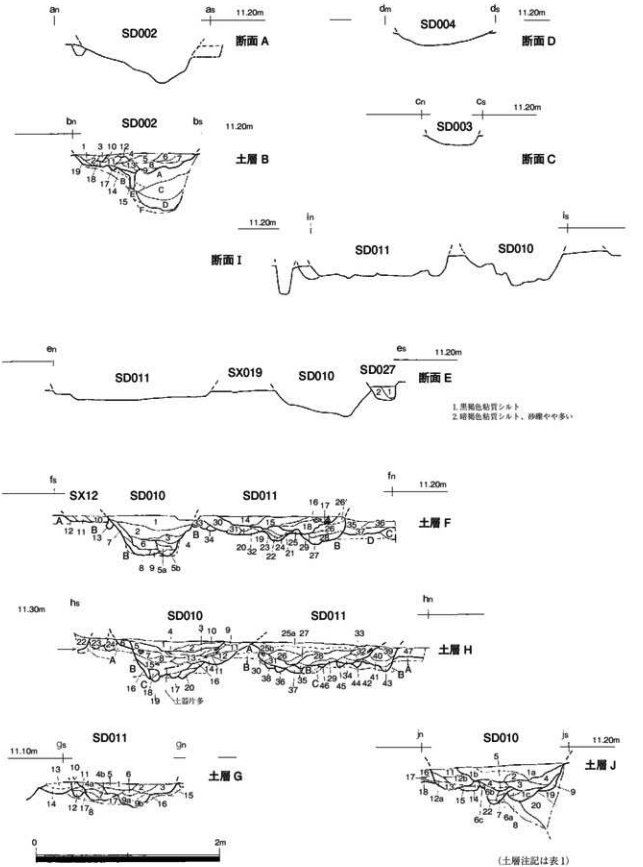


Fig.6　SD002~004,SD010·011 土層図・断面図（1/40）

SD002 土層B

1～21：覆土、A～E：地山
※A・B・C・D は風倒木状落込みの黒一暗褐色シルト層

1. 乾と2に比べると黒味～黒味～暗褐色シルト、白色粒砂多い
2. 1 層より黒い黒褐～黒味色シルト、白色粒砂含むが少ない
3. 2 層と同じシルト層、白色粒砂やや多い
4. 乾と2に比べると黒味～暗褐色シルト、白色粒砂含むが少ない
5. 黒～黒味色シルト、3 層に近く白粒粗砂含む（6～4 層より黒い）
6. 暗灰～黒味色シルト＋白色粒砂やや多い
7. 5 層とほぼ同じ
8. 黒～黒味色シルト＋暗灰色シルト 40%混合
9. 黒～黒味色シルト＋暗灰色シルト 3 層少し、白色粒砂わずか
10. 白色粒砂多い、12 層と同じ
11. 黒褐～黒味色シルト、白色粒砂含むがやや少ない
12. 暗灰色シルト＋白色粒砂多い
13. 黒褐～黒味色シルト、白色粒砂含むがやや少ない、14 層より黒い
14. 黒褐～暗褐灰色シルト＋白色粒砂含む、12 層より黒い
15. 黒（黒褐）～黒味色シルト、白色粒砂含むがやや少ない
16. 暗灰褐～黒味褐シルト、白色粒砂含む
17. 11 層とほぼ同じ（黒褐色＋暗灰色シルト）、白色粒砂含むが少ない
18. 19 層と同じ
19. 暗灰色シルト（砂質）＋白色粒砂多い
A. （黒灰～）暗灰色シルト（砂質）＋白色粒砂やや多い、B 層より黒い（暗い）
B. 暗灰色シルト＋白色粒砂多い、A 層より淡い（やや明るい）
C. 黒灰色シルト、白色粒砂少ない
D. 暗灰色シルトまたは黒灰色シルト＋灰色砂、白色粒砂やや少ない。
E. B 層＋F 層（暗灰色シルト＋F 層粗砂）
F. 灰色砂＋灰白色粒砂

SD010-011 土層F

1. 黒褐色シルト、しまりあり、白色粒砂・小礫やや多く含む、土器片含む、2 層より淡い
2. 黒（～黒褐）色粘質シルト、しまりややあり、白色粒砂・小礫含む（1 層より多）
2a. 白色粒砂・小礫やや多い、土器片含む
2b. 白色粒砂・小礫やや少ない、土器片含む
3. 黒色粘質シルト、白色粒砂含むがやや少ない、土器片、2 層より黒い
4. （黒褐～）黒灰色（やや粘質）、3 層より淡い色、白色粒砂・小礫やや多い、しまりやや弱い、土器片含む（やや大あり）
5. 黒灰色シルト＋白色粒砂・小礫やや多い（4 層より多い）、4 層より淡い色
5a. （＝5 層）
5b. 5 A 層＋灰色砂・粗砂が混入
6. 黒灰色＋暗灰色（やや明るい）シルト＋白色粒砂・小礫多く含む
7a. 黒～暗灰色シルト＋灰色砂＋白色粒砂・小礫多く含む（粗砂・小礫が主体に黒灰色シルトが混じる）、6 より粗砂・小礫多い
7b. 7a 層より白色粒砂若干少ない（が他の層とは多い）
8a. 暗灰色シルト＋白色粒砂・暗灰～灰色砂、しまりやや弱い（8 B 層より暗灰色シルト多）
8b. 灰～暗灰色砂＋白色粒砂＋暗灰色シルト少し、しまりやや強い
9. 灰色砂＋白色粒砂（＋暗灰色シルト汚れ）
10. （暗）灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫多い（＋暗灰色シルト）
11. 暗灰～暗灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫（やや多い10 層より多）、黒灰色シルト少し含む
12. 10 層に近いが白色粒砂はやや少ない
13. 黒～黒灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫少し、（植物根痕跡？）
14. 黒～黒灰褐色シルト、しまりあり、白色粒砂・少礫含む（やや少）
15. 黒～黒褐色（やや粘質）シルト、白色粒砂・小礫多く（やや多く）含む、土器片少しあり、しまりあり
16. 黒褐色粘質シルト、土器片やや多い、白色粒砂・小礫多く含む
17. 黒灰褐色シルト、やや粘、礫あり、白色粒砂・小礫少し含む
18. 黒～黒褐色粘質土、粘性有り、白色粒砂・小礫多く含む、土器片若干、ややしまる
19. 18 層に近い黒色粘質土、まじりなし
20. 黒褐～黒褐灰（18・19 よりやや弱すい）シルト（やや粘）、
21. 白色粒砂・小礫少し多い、土器片少しのみ、21・22 層は類似層
22. 黒～黒褐色粘質シルト、23 層より黒い、白色粒砂少し（～わずか）、土器片
23. 黒灰・黒褐色シルトブロック主体＋白色粒砂＋灰色砂
24. 灰色砂（B 層）＋白色粒砂＋黒灰・黒褐色シルトブロック
25. 黒灰色シルト＋白色粒砂やや多い
26. 黒褐灰（26 より少し、うすい）シルト（やや粘質）＋白色粒砂・小礫多
26'. 白色粒砂・小礫やや多い
27. 26' 層と同じ（26' 層＋白色粒砂多い）
28. 黒灰色シルト（60%～）＋灰（暗灰）色砂＋暗灰色シルト＋白色粒砂多い
29. 28 層＋灰色砂、白色粒砂やや多（黒灰色シルトブロックが 40%＋砂・粗砂）
30. 黒褐～黒褐灰色シルト、しまりあり、白色粒砂・小礫含む、（ふつう）
31. 黒灰色シルト（＋暗灰色シルト）＋白色粒砂・小礫含む（30 層より多）
32. 黒灰色シルト＋暗灰シルト＋白色小礫・粗砂やや多い、しまりやや強い（31 層より多い）
33. 黒褐色粘質シルト、粘性ややあり（しまりは 30 層より弱い）＋白色粒砂・小礫含む（ふつう）
34. 暗灰色シルト＋白色粒砂・小礫多（やや多い）
35. 黒灰＋黒褐色シルト（黒灰褐シルト＋黒褐粘土層）＋白色粒砂多い、遺物片検出
36. （黒褐灰）黒灰色シルト（～暗灰色シルト）（やや粘質気味）＋白色砂（粗砂）やや多い、黒色土小塊含む、遺物片検出含む
37. 黒灰～暗灰褐色シルト（B 層より黒い）＋白色粒砂多い、しまりやや強い、遺物片無し
A. 暗灰黒～灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫多、しまりあり
B. 灰白砂質シルト＋白色粒砂・小礫多、しまりあり
C. 暗灰（～黒褐）色粘質シルト＋白色粒砂多い（やや多）、粘質あるがしまる、
※暗灰褐系粘質層が
D. 暗灰色シルト（砂質シルト）＋灰色砂＋白色粒砂多い、地山か

SD011 土層G

1. 乾ではG層になる暗灰褐（～黒灰）色シルト、白色粒砂多少含む
2. しまりのある黒灰褐色～黒灰色シルト、白色粒砂を含む（1 より少や多い）、土器片
3. 黒褐色シルト＋暗灰～暗灰褐色シルト 10%＋白色粒砂少し、2 より黒い、土器片含む、しまりあり
4a. 乾ではG層になる暗灰褐色シルト、白色粒砂やや多い、土器片
4b. 暗灰褐～暗褐色シルト＋白色粒砂（4 より黒い）
5a. （＝5 層）
5b. 5 A 層＋灰色砂・粗砂が混入
6. 黒灰色＋暗灰色（やや明るい）シルト＋白色粒砂・小礫多く含む
7a. 黒～暗灰色シルト＋灰色砂＋白色粒砂・小礫多く含む（粗砂・小礫が主体に黒灰色シルトが混じる）、6 より粗砂・小礫多い
7b. 7a 層より白色粒砂若干少ない（が他の層とは多い）
8a. 暗灰色シルト＋白色粒砂・暗灰～灰色砂、しまりやや強い（8 B 層より暗灰色シルト多）
8b. 灰～暗灰色砂＋白色粒砂＋暗灰色シルト少し、しまりやや強い
9. 灰色砂＋白色粒砂（＋暗灰色シルト汚れ）
10. （暗）灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫多い（＋暗灰色シルト）
11. 暗灰～暗灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫（やや多10 層より多）、黒灰色シルト少し含む
12. 10 層に近いが白色粒砂はやや少ない
13. 黒～黒灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫少し、（植物根痕跡？）
14. 黒～黒灰褐色シルト、しまりあり、白色粒砂・少礫含む（やや少）
15. 黒～黒褐色（やや粘質）シルト、白色粒砂・小礫多く（やや多く）含む、土器片少しあり、しまりあり
16. 黒褐色粘質シルト、土器片やや多い、白色粒砂・小礫多く含む
17. 黒灰褐色シルト、やや粘、礫あり、白色粒砂・小礫少し含む
18. 黒～黒褐色粘質土、粘性有り、白色粒砂・小礫多く含む、土器片若干、ややしまる
19. 18 層に近い黒色粘質土、まじりなし
20. 黒褐～黒褐灰（18・19 よりやや弱すい）シルト（やや粘）、
21. 白色粒砂・小礫少し多い、土器片少しのみ、21・22 層は類似層
22. 黒～黒褐色粘質シルト、23 層より黒い、白色粒砂少し（～わずか）、土器片
23. 黒灰・黒褐色シルトブロック主体＋白色粒砂＋灰色砂
24. 灰色砂（B 層）＋白色粒砂＋黒灰・黒褐色シルトブロック
25. 黒灰色シルト＋白色粒砂やや多い
26. 黒褐灰（26 より少し、うすい）シルト（やや粘質）＋白色粒砂・小礫多
26'. 白色粒砂・小礫やや多い
27. 26' 層と同じ（26' 層＋白色粒砂多い）
28. 黒灰色シルト（60%～）＋灰（暗灰）色砂＋暗灰色シルト＋白色粒砂多い
29. 28 層＋灰色砂、白色粒砂やや多（黒灰色シルトブロックが 40%＋砂・粗砂）
30. 黒褐～黒褐灰色シルト、しまりあり、白色粒砂・小礫含む、（ふつう）
31. 黒灰色シルト（＋暗灰色シルト）＋白色粒砂・小礫含む（30 層より多）
32. 黒灰色シルト＋暗灰シルト＋白色小礫・粗砂やや多い、しまりやや強い（31 層より多い）
33. 黒褐色粘質シルト、粘性ややあり（しまりは 30 層より弱い）＋白色粒砂・小礫含む（ふつう）
34. 暗灰色シルト＋白色粒砂・小礫多（やや多い）
35. 黒灰＋黒褐色シルト（黒灰褐シルト＋黒褐粘土層）＋白色粒砂多い、遺物片検出含む
36. （黒褐灰）黒灰色シルト（～暗灰色シルト）（やや粘質気味）＋白色砂（粗砂）やや多い、黒色土小塊含む、遺物片検出含む
37. 黒灰～暗灰褐色シルト（B 層より黒い）＋白色粒砂多い、しまりやや強い、遺物片無し
A. 暗灰黒～灰褐色シルト＋白色粒砂・小礫多、しまりあり
B. 灰白砂質シルト＋白色粒砂・小礫多、しまりあり
C. 暗灰（～黒褐）色粘質シルト＋白色粒砂多い（やや多）、粘質あるがしまる、
※暗灰褐系粘質層が
D. 暗灰色シルト（砂質シルト）＋灰色砂＋白色粒砂多い、地山か

SD010-011 土層H

1. 乾と2に比べると、暗灰褐色シルト（砂質シルト）＋白色粒砂多い
2. 黒灰褐～暗灰褐色シルト＋白色粒砂多い（＋暗灰色・灰色シルト）
3. 黒褐灰色シルト（粘質）、白色粒砂わずか（まじり少ない）
4. 黒褐色シルト＋白色粒砂多い
5. 黒褐灰色シルト（＋暗灰褐色シルト少し）＋白色粒砂やや多い
6. 黒褐色シルト（5 よりやや黒い？）＋白色粒砂やや多
7. 黒灰褐～黒褐色シルト（＋暗灰色シルト少）＋白色粒砂がやや多
8. 7 層＋白色粒砂やや多くなる
9. 1 層と同じ
10. 4 層＋暗灰褐色シルト少し（白色粒砂多い～やや多い）、10-11 層はほぼ同じ
11. 黒褐色（～黒灰褐色）シルト＋白色粒砂（やや）多い
12. 黒褐色シルト（＋暗灰色シルトわずか）＋白色粒砂含むがやや少ない、赤色粒子わずかに含む、12 ～ 14 層は一連のもの
13. 黒褐色（粘質）シルト＋白色粒砂ややあり（12・14 層より多い）、（黒褐）、
14. 13 層とほぼ同じ、白色粒砂は少なめ（わずか）（＋暗褐色シルト少）
15. 黒褐色（粘質）シルト＋暗灰褐色シルト 10%＋白色粒砂多い、（青黒褐）、土器片やや目立つ
16. 黒褐色シルト＋暗灰色シルト 49 ～ 30%＋白色粒砂ややあり
17. 黒褐色シルト＋灰色砂 21%＋白色粒砂少し
18. 暗灰～暗褐灰褐色シルト＋黒褐色シルト 40%（＋粗砂）
19. 黒褐色シルト主体＋暗灰色砂 30%（＋粗砂）
20. 暗灰色砂＋粗砂（灰～白色）50%以上＋黒灰色シルト L 層
21. A・B 層和土暗褐灰～暗灰色シルト 49（白色粒砂少し）＋黒褐色シルト L 10%＋
22. 黒褐色シルト（粘質）＋暗灰褐色シルト 30%＋白色粒砂少し、土器片、（ビット？）
23. 黒褐色シルト＋暗褐～暗褐灰色シルト 40%＋白色粒砂やや多い（23 より多）
24. 暗褐～暗褐灰（黒褐灰）色シルト＋黒褐色シルト 40%＋白色粒砂多
25. 上半分者くと灰色砂、暗褐灰～（黒褐ないし）暗褐色シルト、白色粒砂多、土器片若干
（25a ～暗灰褐色、25 B ～黒褐色シルト）
26. 黒褐色シルト（粘質）＋暗灰褐色シルト（少）＋白色粒砂ややあり、しまりややあり
27. 黒褐色シルト（粘質）白色粒砂（やや少）、しまり 26 層よりあり
28. 黒褐色シルト（＋暗灰褐色シルト少）＋にぶい灰黄色粘土（わずか）＋白色粒砂やや多い、27 層より色が濃い
29. （26 層より色が黒い）黒褐色シルト＋白色粒砂やや多、土器片あり
30. 黒褐色シルト（粘質）＋白色粒砂少し、土器片あり
31. 黒褐色シルト（粘質）＋黒灰褐色シルト＋暗灰色シルト（粘質）＋白色粒砂多い、しまりはいい
32. 白色粒砂多い、黒灰褐色シルト＋白色粒砂多（＋暗灰色砂）
33. 白色粒砂やや多い、黒褐～黒灰褐色シルト＋暗灰色シルト・砂 21%
34. 黒褐色シルト＋暗灰褐色シルト（砂 30%＋白色粒砂多）
35. 黒褐色シルト（粘質）＋暗灰色シルト（21%）＋白色粒砂やや少（しまりやあり）、
36. 37 層とはほぼ同じ
37. 暗灰色シルト砂＋黒灰色シルト L 少＋白色粒砂やや多い
38. 和土層H、B 層より白色粒砂少なく、しまりはいい
39. 黒褐色（粘質）シルト＋白色粒砂若干
40. 黒褐色シルト＋にぶい（暗）灰黄粘質シルトブロック 30 ～ 21%＋白色粒砂若干～やや多い
41. 黒褐色シルト＋暗灰褐～黒灰色シルト砂 30%＋白色粒砂やや多
42. 41 層＋C 層（暗灰色シルト砂・粗砂多い）
43. 黒灰～黒褐色シルト（砂質）、しまり
44. C 層＋黒灰色シルト 40%
45. C 層＋黒灰褐シルト・暗灰色砂 40%
46. C 層に黒色・黒灰色シルト L（＋暗灰色砂）
47. 土器片などを含む、黒褐～黒褐色シルト、白色粒砂若干、39 が黒い
A. 暗褐～暗褐灰色シルト
B. 暗灰（にぶいオリーブ灰）色シルト・砂＋白色粒砂、しまりやや強い
C. 灰色砂＋灰色・白色粒砂、しまりややあり
（A ～ C は地山砂層）

SD010 土層J

1a. 黒褐色シルト＋粗砂、しまりややあり、1 b 層より黒い、土器片
1b. 黒褐色（～暗褐色灰色）シルト＋粗砂やや多い、しまりあり、土器片
2. （暗）褐灰（灰褐）色シルト＋白色粗砂多い、しまりあり、土器片
3a（4）. 黒褐灰色シルト（1 層よりうすい色、3 b 層より黒い）＋白色粗砂やや多い、土器片
3b. 黒褐灰～暗褐灰色シルト（3 a 層よりややうすい）＋白色粗砂、土器片少し
5. 黒灰褐＋暗灰色シルト＋粗砂
6. 黒灰褐色粘質シルト＋暗灰色シルト混灰、粗砂少し、しまり強い
6a. 黒灰褐色シルト主体
6b. 黒褐色シルト＋暗灰シルト＋白色砂粒（粗砂）やや多い
7. 黒灰～黒色粘質シルト、粗砂わずか、しまりやや強い
8. 地山白粘色砂質シルト＋白色粗砂多＋黒灰色シルトブロック
9. 暗褐灰色シルト＋黒～黒褐色シルトブロック＋白色粗砂、しまりややない
10. 暗灰（～黒褐）色シルト＋暗褐色シルト混灰＋白色粗砂多い
11. 黒灰（～暗灰）色シルト＋暗褐色シルト＋白色粗砂（暗灰褐＋暗灰色）＋白色粗砂
12a. 12 層の中で 11 層に近くやや黒い
13. 12 層＋灰色砂混入
14. 暗褐～暗灰褐色シルト＋白色粗砂多い
15. 土層に黒灰～暗灰色シルト L（ブロック大）
16. 11 層とほぼ同
17. 12 層と似る（12 ブロ）
18. 12 層と似る（12 ブロ）
19. 暗褐（～黒褐灰）色シルト（粘質）＋白色粗砂やや多い
20. 黒灰（～暗灰）色粘質シルト＋白色粗砂多
21（＝B）. 暗灰色シルト＋白色粗砂多い（19 ～ 21 は地山であるが、風倒木根痕土か）
22. A 層＋黒灰色シルトブロック、しまりはいい
A. 暗灰色粘質シルト＋明灰色粗砂・白色粗砂少な多い、地山

SD091 土層K (Fig.7)

1. 黒（～黒灰）色シルト＋暗灰色シルト 21%＋白色粗砂多し
2. 黒灰～暗灰色シルト＋灰色シルト 30%＋白色粗砂
3. 黒灰褐～黒褐灰色シルト＋白色粗砂やや多～若干（暗灰色シルト 10%）
4. 黒～黒褐色シルト＋白色粗砂やや多
5. 黒灰褐～黒褐灰色シルト＋暗灰色シルト 15%＋白色粗砂やや多い、炭粒少し
6. 暗灰（にぶい暗灰褐）色シルト＋黒褐色シルトブロック 30%＋白色粗砂多
7. 白色粗砂多い＋暗灰～にぶい灰色シルト砂
8. 暗灰色シルト砂＋黒灰色シルトブロック 20%＋白色粗砂多～やや多
9. 暗灰色シルト＋黒灰色L 15%＋白色粗砂多
10. 6・8 層に近いがしまりはい（白色粗砂やや多、8 層より少）
11. にぶい灰褐～暗灰色シルト＋黒灰褐シルト 30%、白色粗砂やや多、しまり 12 より多
12. 1 層より 11 より多い、暗灰色シルト＋黒灰色シルト（ミ状）
13. 黒～暗灰色シルト＋暗灰色シルト 10%＋白色粗砂少し（しまりややない）
14. 灰～灰褐色砂に黒灰色シルト L 30%＋粗砂多い（ミ状）
15. 粗砂・にぶい灰褐色シルト砂（一部黒色L）
16. 白色粗砂多（白）＋暗灰色シルト砂（黒灰色L）
17. 暗灰～にぶい灰褐色砂＋粗砂多
18. 暗灰色シルト砂＋白色粗砂多い（粗砂主体）

表 1：溝 SD002,SD010・011,SD091 土層注記（土層 K 以外は Fig.6）

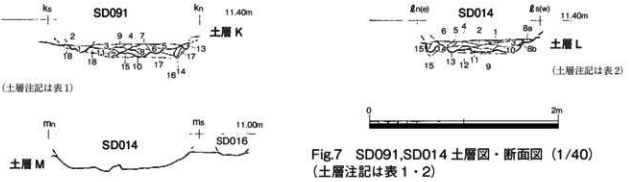


Fig.7 SD091,SD014 土層図・断面図（1/40）
（土層注記は表１・２）

Ⅱ．調査の記録

１．調査地点の位置と基本層序

井相田Ｃ８次調査地点は、遺跡の北側縁辺部中央にあり、現況はもと水田地を埋め立てた平坦地である（Fig.2）。周囲では、南西側 30 mに４次調査地点（「６次」とされたが訂正）があり、弥生時代前期、古墳時代中期、古墳後期～奈良時代前半までの集落が検出されている（519 集）。古墳時代から飛鳥時代は土坑、井戸、建物が多数あり、溝で区画された屋敷地が想定される。調査区の南半は旧流路であり、２次調査東縁部から続くものである。また南東 80 mには３次調査地点があり、弥生前期～中期初頭の集落と、古墳後期～飛鳥時代前半（６世紀後半～７世紀前半）の集落が検出された（658 集）。３次東側は旧流路の落込みとなる。この旧流路は８次の北側に続いていくと考えられる。３次・４次の６～７世紀の集落は方形の区画溝による屋敷地が展開し、本調査（８次）も同様の状況であった。８次地点の周囲標高は 12.0 ～ 12.2 m、今も一部に残る水田面の標高は 11.0 ～ 11.5 mである。

基本層序は Fig.5 に示したが、地表下−80cm 前後まで近年の盛土で、この下部が旧水田層となる。水田層の下、標高 11.0 ～ 11.1 m以下で遺物包含層となり、さらに標高 10.6 ～ 10.9 mで地山のシルトないし砂層となり、この上面で遺構を検出した。地山とした層は沖積層であり、堆積物が一定しておらず、遺構覆土との差異が不明瞭な部分もあった。地山上面は、総じて南側がやや高く、北西側がやや低くなる。包含層の堆積も、南側は薄く、北西側が厚い。遺物量もこれに比例して調査区西・北半が多い。なおこの包含層は、後世の水田開発などにより二次的に形成されたものと考えられる。

Ph3. SD002・003・004（西から）

２．調査の経過と概要

本調査は 2007 年４月 16 日より開始した。廃土置場と重機の展開の都合上、調査区は南側 2/3 のⅠ区と、北側 1/3 のⅡ区に分割し、反転して調査した。4/16･17 にかけてⅠ区の表土を重機により掘削した。4/18 に発掘機材を搬入し、安全対策など現場設営を行った。4/19 より調査区内の作業を開始した。４月下旬から５月上旬に遺構の検出・掘削を行い、順次記録作業を行った。5/9 にはⅠ区全体の清掃を行い、全景を撮影した。5/15 までにⅠ区の記録作業を終了し、同日に重機によりⅡ区への反転掘削を行っ

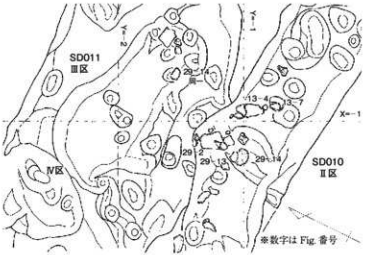


Fig.8　SD010･011－Ⅱ区遺物出土状況図(1/30)

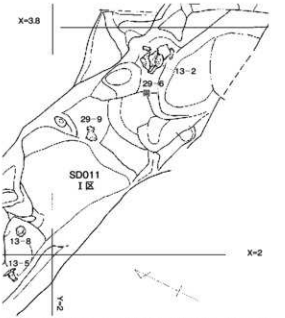


Fig.9　SD010－Ⅰ区遺物出土状況図（1/30）

Ph4.　SD010－Ⅱ区―遺物出土状況（東から）

Ph5.　SD010－Ⅱ区―遺物出土状況（南から）

た。5/16よりⅡ区の調査作業を行い、5/21にはⅡ区の全景を撮影した。5/24まで記録作業を行い、5/29に重機による埋め戻しとともに機材の撤収を行い、本調査を終了した。

検出した主な遺構には、溝状遺構（SD002・003・004，SD010，SD011，SD014・091，SD015・016）、大型土坑（SK005・006）、いくつかの土坑などがある。多数の柱穴・ピットがあるが、明確な建物は復元できなかった。ただし、溝に沿うピット群の一部は構列になる可能性がある。出土遺物は、総量でパンケース25箱分がある。古墳時代中期・後期～飛鳥時代の土師器・須恵器が多い。次に弥生時代前期～中期初頭の土器がやや目立つほか、弥生時代後期末から古墳時代前期、古代の須恵器・土師器・瓦器なども少量出土した。また弥生時代前期の石器、古墳時代後期の石製品、木製品も出土している。

3．検出した遺構と遺物

基本層序の項で述べたように、二次的な形成ではあるが遺物包含層が地山の上に堆積している。調査区南半のⅠ区では（調査区グリッドはFig.3）、小片の遺物が僅かに散在する程度であったので、これをほぼ無視して地山直上まで重機で掘削している。ただし、Ⅰ区の北側では遺物の出土がやや多くなってきたので、Ⅰ区北端の1m（Y＝－0.5～－1.5）は遺物が多くなったレベルで重機掘削を止め、包含層を人力掘削した。また後述の**SD010とSD011の上面**は遺構が分離できず、包含層**SX001**として出土遺物を分離している。Ⅱ区では、Ⅰ区北側から続き包含層の遺物が多かったので、地山面の10cm前後上部で重機掘削を止め、包含層全体をグリッドに分けて人力掘削し、遺物を取り上げている。

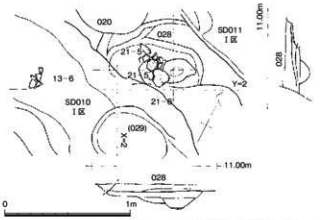


Fig.10　SD010－Ⅰ区西 ,SK028 遺物出土状況図 (1/30)

Ph6. SK028,SD010－Ⅰ区遺物出土状況
(西から)

これら包含層の遺物については後述することとし､以下は各遺構とその出土遺物について記述したい。

なお、溝の深度がきわめて浅いなど遺構の遺存度はいずれも良好ではなく、調査区の遺構面は全体に削平を受けていると考えられる。遺物包含層の形成も、水田開発などの造成と関係があろう。

(1) 溝状遺構 (Fig.6 ～ 14)

SD002, SD003, SD004 (平面図はFig4参照、土層図・断面図はFig6、PL3－1、Ph3)

Ⅰ区中央で検出した。各溝には切合いがあり、SD003 → SD002、SD003 → SD004という関係だ**が、ほぼ同一方向であり、当初は一連の溝として掘削され、一度ある程度埋没した後に、SD002とSD004の部分が再び掘削されたものであろうと考える。**

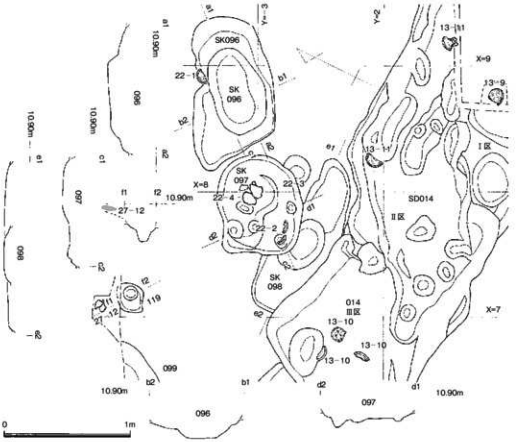


Fig.11　SD014,SK096・097 遺物出土状況図 (1/30)

溝は、N－70°－W 前後の方位で走行するが（以下、方位北は磁北を基準とする）、調査区西側（SD002 西側）は南へ曲がる可能性もある。溝はいずれも削平が進み、検出幅は 60 ～ 130cm、深度はかなり浅い遺存である（Fig.7－A ～ D）。SD002 は比較的深い部分がある（Fig.7－断面A）。いずれの溝も底面に凹凸があり（SD004 はこのため地山と覆土の差異が不明瞭で掘りすぎてしまった）、埋土からもある程度水が流れていた可能性がある。

Ph7. SD014・091,SK096・097 検出状況（北東から）

出土遺物はいずれも少ない。少量の土師器と須恵器が出土した（**Fig.12**）。**1** は SD002 － Ⅱ区上層で出土した須恵器の杯蓋で、ⅢA 期新相～ⅢB 期のもの。**2** は土師器の小型壺。精選胎土の精製土器で、中期前半に上るものか。**4** は SD004 出土で、ⅢA 期の杯蓋の小片である。

SD010（平面図は Fig4、土層図・断面図は

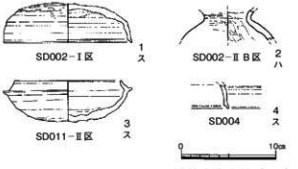


Fig.12 SD002・004,SD011 遺物出土土器（1/4）

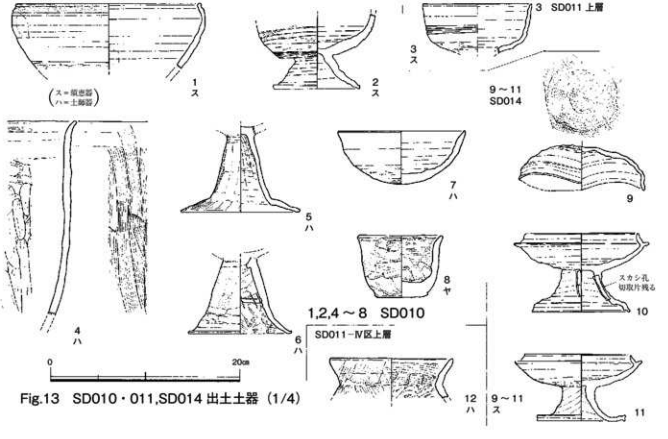


Fig.13 SD010・011,SD014 出土土器（1/4）

Fig6、PL.4・6、PL.1－3.2－4 ～ 6.3－1・2.4－3）出土遺物はいずれも少ない。少量の土師器と須恵器が出土した（Fig.12）。**1** は SD002－Ⅱ区上層で出土した須恵器の杯蓋で、ⅢA期新相～ⅢB期のもの。2は土師器の小型壺。精選胎土の精製土器で、中期前半に上るものか。**4** は SD004 出土で、ⅢA期の杯蓋の小片である。

Ph8. SD091,SK099・101 遺物出土状況（北西から）

SD010（平面図は Fig4、土層図・断面図は Fig.6－E・F・H・I・J、Ph4・6、PL.1－3.2－4 ～ 6.3－1・2.4－3）

Ⅰ区北半で検出し、西側はⅡ区で検出した。Ⅰ区検出部分は「Ⅰ・Ⅱ区」、溝西端のⅡ区側は「ⅢⅡ区」として区分けし（Fig3）、遺物を取り上げた。当初は SD011 との分離ができず（溝Ⅰ・Ⅱ区）、これを包含層 **SX001** としていたが、下げていくと SD011 との間に空間地があらわれた。溝西側では SD011 と接し、土層断面などから（Fig6－土層 F・H）、SD011 を切ると判断した。溝は N－76°－W 前後の方位で走行するが、西側は南側に屈曲する可能性が高い。SD002 ～ 004 と平行する可能性もある。溝幅は

SD014　土層 L　(Fig.7)

1. 乾くと灰色になる暗褐色シルト＋粗砂やや多い
2. 黒色～黒灰褐色シルト＋粗砂やや多い、（1 層より黒い）、4 層よりは白色粗砂多い、しまりあり
3. 暗灰褐（＋黒灰）色シルト（乾くと灰褐色）＋粗砂多い
4. 黒褐～黒褐灰色シルト＋白色粗砂やや多い
5. 白色粗砂主体＋暗灰色粗砂＋黒灰色シルト、（2 層より黒く、2 層よりしまり甘い）
6. 2 層とほぼ同じ
7. 黒灰色シルト＋白色粗砂多い、しまり（6 層より）やや甘い
8. 灰色シルト（砂質）＋白色粗砂主体（あわめで多い）
9. 黒褐色シルト＋白色粗砂（他よりやや少ない）
10. 暗褐灰（＋黒灰）色シルト（暗灰褐＋黒灰色混状）＋白色粗砂やや多い、しまり 3・9 層より甘い
11. 黒褐色＋暗灰（黒灰）褐色シルト、しまり 9 層より甘い、白色粗砂含むがやや少ない
12. 14 層に黒灰色シルトしみ、砂質シルト＋白色粗砂
13. 11 層＋暗灰シルト砂＋白色粗砂やや多い
14. 暗褐灰～ぶい褐灰色砂（砂質シルト）＋白色粗砂きわめて多い、14・15 層は漆黒土より砂質（地山）
15. 黒褐灰色シルト砂＋白色粗砂多い、しまりあり、漆黒土より砂質（地山）

SK005　(Fig.15)

1. 黒～黒褐色土粘質シルト・シルト、白色粗砂・小礫多く含む、しまりあり かたい、土器片若干含む
2a. 黒～黒褐色シルト＋灰色砂＋白色砂＋白色粗砂・小礫かなり多い、白色礫かなり多い
2b. 2a 層より砂・粗砂・小礫少ないが 1 層より多い、黒色シルト層、白色礫かなり多い
3. 黒褐～黒（灰）色粘質シルト、しまりやや甘い、白色粗砂・小礫含む（やや多い、1 層より少ない）
4. 黒褐～黒色粘質シルト、白色粗砂・小礫を含むがやや少ない、灰色砂を少し含む
（4 ～ 5 層最標砂）
5a. 4 層より黒味強い（漆黒～青黒）黒色粘質シルト～粘土層（粘性強い）、木片（木製品含む）を含む、4 層よりも小礫少ない
5b. 黒灰色粘質シルト（粘性強）＋漆黒色シルト板戸状ブロック＋白色粗砂・小礫少し
6. 黒色粘質シルト＋暗灰～黒灰色シルト＋暗灰色砂＋白色粗砂・小礫やや多い
7. 黒褐色シルト＋黒灰（暗灰）色シルト＋白色粗砂・小礫やや多い
8. 黒色シルト＋灰色砂＋白色粗砂・小礫やや多い（8 ～ 9 層）最標
9. 8 層より灰色砂が多い、白色粗砂・小礫やや少ない、黒色シルト主体層
10. 黒色粘質土、縞のように粗砂（5 a 層の下）がのる部分あり、木小片
11. 12a 層とほぼ同じ、白色粗砂・小礫やや多く含む
12a. 黒色粘質シルト（粘質土）＋暗灰～黒灰色砂質シルト（少）＋白色粗砂少し
12b. 黒灰色粘質シルト＋黒色シルト＋暗灰色砂少し、白色粗砂・小礫少し（12b 層下、32 層上に暗灰～黒灰色粘土の間層あり）
13. 黒色粘質シルト＋灰白色砂・白色粗砂若干
14. 13 層＋灰色砂・白色小礫（粗砂）多い
15. 黒色（粘）シルト＋暗灰色シルト（砂）＋白色粗砂少し
16. 15 層＋灰色砂・白色粗砂・小礫やや多い、16 ～ 19 層に続く感じ
17. 15 層と同じ
18. 黒色粘質土＋灰色砂＋灰白色小礫・粗砂
19. 灰～灰白色砂・粗砂＋黒色粘土 20%
20. 黒色粘質シルト＋暗灰色シルト（20%）＋白色粗砂・小礫
21. 黒～黒灰色シルト（やや粘質）＋暗灰色シルト（砂）20%＋灰色砂 20%＋白色粗砂やや多い
22. 黒色粘質土＋粗砂少し
23. 灰～黄灰色粗砂＋黒灰～暗灰色シルトしみ（23 ～ 24 層は連続的）
24. 灰色～暗灰色砂（粗砂）＋黒色シルトしみ
25. 26 層＋（灰）暗灰色シルト多い
26. 黒色シルト（やや粘）＋暗灰色砂質シルト（少）＋白色小礫・粗砂
27. A・B 層地山（暗灰～灰色砂質シルト＋白色粗砂・小礫多）＋黒色シルトまじり
28. 黒色シルト（60%以上）＋白色粗砂・小礫やや多＋黒色シルトブロック含む（20%）
29. 暗灰色シルト（60%以上）＋白色粗砂・小礫やや多い＋黒色シルトブロック（20%）
30. 白粘（灰色シルト＋白色粗砂・小礫多）崩れ＋黒色シルト少し混入（10%）
31. 黒色シルトブロック（～黒灰色シルト）主体（80%以上）＋ 32 層と同じ砂層（灰色砂質シルト・砂＋白色砂礫）
32. 灰～黄灰色粗砂＋灰白色砂ブロック・粗砂＋暗灰色砂、シルトブロック・しみ 20%（一部黒灰色シルトブロック）
33. 暗灰色シルトしみ多い（30%）、灰～黄灰色粗砂・砂（粗砂主体）
34. 35 層とほぼ同じ、小礫・粗砂多い（灰色砂・粗砂＋暗灰色シルトブロック 20 ～ 30%）
35. 灰色砂・粗砂＋白色粗砂・小礫＋暗灰色シルト（・砂）ラミナ薄板および暗灰色シルトブロック 20%
36. 灰色粗砂＋砂（＋暗灰色砂多い）、粗砂層
37. 35 層＋黒色粘質土ブロック 10 ～ 20%（ブロック・ラミナ）
38. 35 層＋灰白色砂（C 層）＋暗灰色シルト（砂質）少し（5%）
39. 38 層＋暗灰色シルト砂ブロック・しみ状
40. 地山に崩れた砂層、暗灰色シルト・砂しみ入る、しまりC層よりやや甘い
41. A 層崩れ砂層
（A ～ C は地山）
A. 暗灰色シルト＋白色粗砂多く含む、しまりあり
B. 灰色シルト（砂質）＋白色粗砂多く含む、しまりややあり
C. 灰白～黄灰色粗砂、しまりややあり

SK022　(Fig.23)

1. 黒色～黒灰（黒灰褐）色粘質シルト＋白色粗砂やや多い
Ⅰ. 黒色粘質シルト＋白色砂粒若干
（SK023 との境界不明瞭）
2. SK023 ～ 2 層と同じ
3. SK023 ～ 3 層と同じ
4. 灰色砂＋白色礫粒＋暗灰色シルト
A. SK023 周辺地山A層と同じかより暗灰色シルトさらに多い（＋白色粗砂多い）
B. SK023 周辺地山B層と同じ
C. SK023 周辺地山B層と同じ

SK023　(Fig.23)

1. 黒～黒灰褐色粘質シルト（2 層より黒く粘質強い）＋白色粗砂やや多い
2. 黒褐灰～黒灰色シルト（やや粘質）＋暗灰色（砂質）シルト少なく、白色粗砂多い
3. 黒灰～暗灰色シルト（やや粘質＋砂質）＋白色粗砂多い
4. 暗灰色シルト＋黒灰色（粘質）シルト＋白色粗砂多
5.（表）灰色～灰白色砂・粗砂＋暗灰色シルトしみ状、（ただのシミか？）
5'. C 層（灰～灰白色粗砂）＋暗灰色シルトしみ状、（ただのシミか？）
（A ～ C は地山）
A. 暗灰～ぶい褐灰色シルト（砂質）＋白色粗砂かなり多い（地山）
B.（表）灰色粗砂（砂）＋灰白色粗砂多い、C 層より濃い（暗い）色
C. 灰灰白（灰白）色粗砂＋白色粗砂多い（かなり多い）、暗灰色のしみ状ブロックあり

SP045　(Fig.26)

1. 黒色粘質土、灰色砂こくわずか、白色粗砂こくわずか
2. 灰色～暗灰色シルト（砂質）＋白色粗砂
3. 黒色粘質土＋暗灰色砂 10 ～ 20%＋白色粗砂わずか
4. 黒～黒灰色粘質シルト＋暗灰色砂 20 ～ 30%＋白色粗砂
5. 黒～黒灰色シルト＋暗灰色砂 40%＋白色粗砂を含む
6. 暗灰色砂質シルト 50%＋黒色シルト（＋白色粗砂）、黒色粘シルト 50%
7. 暗灰色シルト＋灰色砂＋白色粗砂
8. 7 層＋黒灰色シルト
9. 黒色粘質土＋黒灰～暗灰色シルト少し（白色粗砂こくわずか）、粒密か？
10. SD002 東上、黒灰～暗灰色シルト＋白色粗砂を含む

SP024　(Fig.23)

1. 黒色シルト（粘質）70%＋暗灰色シルト＋白色砂礫（粗砂）やや少、土器小片含む
2. 黒色粘質シルト＋灰色砂・粗砂少し
3. 黒色シルト 60%＋暗灰色シルト 30%＋白色粗砂（斑状に混入）
4. 暗灰褐色シルト＋白色粗砂・小礫
5. 灰色砂・粗砂＋黒色シルトしみ
6. 黒色シルトブロック 50%＋5 層灰色砂・白色粗砂
7. 黒色シルト＋暗灰色シルト（砂質）＋粗砂
8. 灰色～白色粗砂主体＋黒色シルトしみ状

表 2：溝 SD014,SK005 ほか土坑・柱穴土層注記

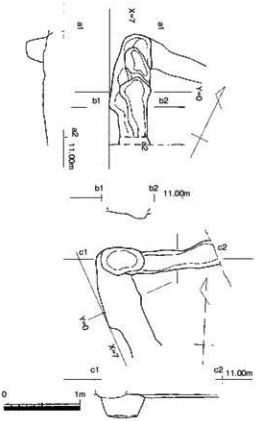


Fig.14　SD015・016 実測図（1/50）

60 ～ 100cmの遺存である。溝の断面は逆台形ないし幅広のU字形だが、底面レベルは一定ではなく（10.55 ～ 10.70 m）、東西どちらが深いとも言えない。底面に植物の生痕や流水の痕跡とみられる細かい凹凸がある。土層断面からは、溝浚えや掘り直しがされていた可能性もある。

遺物は散漫だが、全体的に多く出土した。上層が比較的多いが、中層以下も少なくない。遺存度の高い遺物も出土した（Fig.8 ～ 10、Ph4 ～ 6）。**Fig.13－1・2・4 ～ 8** は、現場で番号取り上げした遺物である。

1（Fig.13） は須恵器の鉄鉢形土器（中島恒次郎 1997 の「鉢Ⅲ」）で、Ⅴ期（中島 1997 のⅡ－2 期）かそれ以降。**2** は椀状坏部の小型高坏。坏部に細いヘラ描ラセン沈線が廻る。Ⅳ期の幅内。**5・6** は古墳中期の高坏で、**5** は中期前半（重藤 2002 の３Ｂ期）。**6** は中期後半か。**7** は須恵器坏蓋を模倣した土師器。深い形状のため杯身（鉢）としての使用だろう。古墳後期。**8** は弥生土器で後期前半～中頃の小型鉢。混入品である。**Fig.29**（25 頁）にも出土土器を掲載した（1 ～ 14.23）。**1** はⅢＢ期の杯蓋。**2** の甕はⅢＢ～Ⅳ期。**3 ～ 12** は古墳中期の土器群。**3** は布留系甕の名残のある内湾口縁の甕。**7** の高坏は坏底部と口縁部の接合面に放射状の刻みが疎らに施される。**11** は脚台付鉢。**12** は二重口縁壺であり、最も新しい時期のもの。**3 ～ 12** は古墳中期前半（重藤編年の３Ｂ期）のセットになりうる。**13・14** は同一個体か。頸部から胴部上半がカキメ状ヨコハケ、口縁部も須恵器的な作りだが、内面や胴部外面下半の作りは土師器的。古墳後期。**14** は同一個体片が SD011 にもあり、本来は SD011 に伴う。**23** は外面格子目タタキ、内面ナデの軟質土器。古墳中期の**韓式系（韓半島系）土器**の甕ないし短頸壺。**22**（Fig.29）も同一個体か。以上、Ⅳ～Ⅴ期の須恵器があり、溝の存続幅を示すか。古墳中期土器も多く、当初の掘削は中期に遡るとも解釈できるが、その場合は一度ある程度埋没して SD011 が臨に掘られ、さらにその埋没進行後に SD010 が再掘削されたことになる。ただし、中期の遺構である **SK028** を切り（Fig.10）、他にも中期の遺構群があったところに溝が掘削されて、中期の遺物が一括して混入した可能性も考えられる。

＜註＞本書における須恵器編年は、小田富士雄による大別（九州編年）を用いるが（小田 1964「九州の須恵器研究序説」『九州考古学』22、小田 1977「豊前地方における須恵器」『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財研究会、など）、その様式内容ついて、Ⅱ～Ⅴ期は高橋徹・小林昭彦 1990「九州須恵器研究の課題」『古代文化』42－4、Ⅳ～Ⅵ期は中島恒次郎 1997「七世紀の食器－九州消費地－」「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東５　7 世紀の土器－」（以下、「中島分類（編年）」とする）を参照している。さらにⅣ期は中島編年を参考にして、そのⅠ期をⅣ－1・2 期（Ⅳ期前半）に、Ⅱ期をⅣ－3・4 期（中島編年Ⅱ－1 期／Ⅱ－1 期新相～Ⅱ－2 期古相）およびⅤ期（Ⅱ－2 期）に細分する（久住猛雄 1999「出土須恵器の編年とＥ－2・3 号墳の築造・追葬の年代について」『羽根戸南古墳群』福岡市報告 661 集）。その実年代は、Ⅳ期を 590 年頃から 660 年代までとし、Ⅴ期を 660 年代から 670 年代前半と考えるが、その根拠は久住 1999 による。従来の九州での編年より新しく見るが、畿内（飛鳥・難波）の土器編年の実年代観（佐藤隆 2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要』第 2 号、など参照）との様式内容との対照では整合的である。実年代観から、Ⅳ期～Ⅵ期は「飛鳥時代」とした。なお、挿図中の「坏Ⅱ・Ｇ・Ｂ」の表示は奈良国立文化財研究所分類である。また古墳時代中期の編年は、重藤輝行 2002「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『第５回九州前方後円墳研究会　古墳時代中・後期の土師器』による（「重藤編年」）。

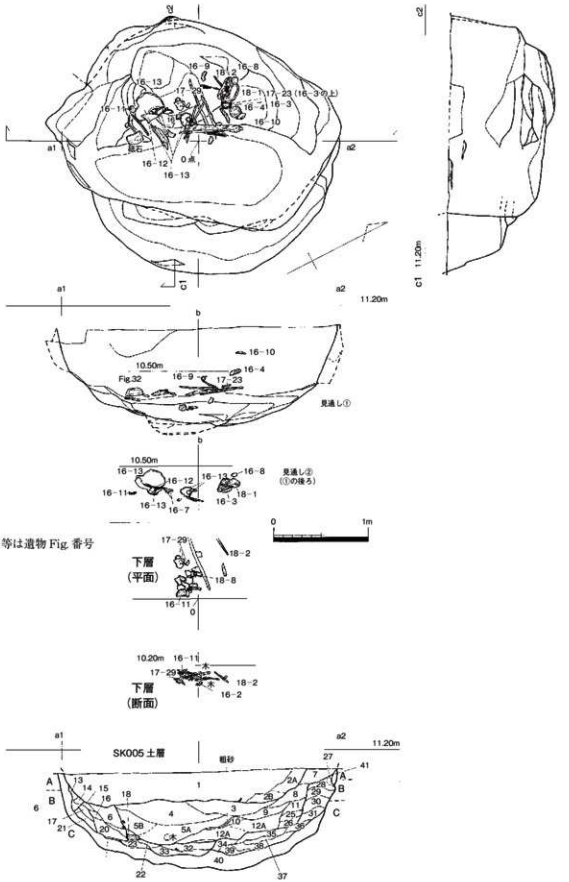


Fig.15　SK005　実測図・土層図（1/40）

SD011　(平面図はFig.4、土層図・断面図はFig.6−E・F G・H・I、PL.1−3.2−5・6.3−1・2.4−3.5−1・6)

Ⅰ区北半のSD010より北側で検出し、西側はⅡ区で検出した。Ⅰ区側は「Ⅰ・Ⅱ区」、Ⅱ区側は「Ⅲ・Ⅳ区」と溝内を区分けし（Fig.3）、遺物を取り上げた。溝の西側でSD010と接するが、SD010に切られていると判断した。溝はN−88°−W前後の方位で走行する。SD010と異なり、調査区外西側も直線的に延びると予想する。溝幅は120〜170cmの遺存でSD010よりも広いが、幅に比して浅い。削平され上部が不明だが、溝の断面は幅広の箱形となるか。土層からは、何度か掘り直され、当初の溝幅より狭い逆台形ないしU字形となった時期があるようである。底面レベルは一定ではないが（10.58〜10.80 m）、SD010よりも全体にやや浅く10.70 m前後が多い。強いて言えば東側がより浅い。SD010と同様に、底面に植物の生痕や流水の痕跡とみられる凹凸があるが、浅くなる（10.80 m前後）。東側では底面が平坦化し凹凸は目立たない。遺物の出土は散漫だが、SD010に次いでやや多く出土した。上層が比較的多いが、中層以下も少なくない。遺存度の高い遺物も出土しているが(Fig.8、

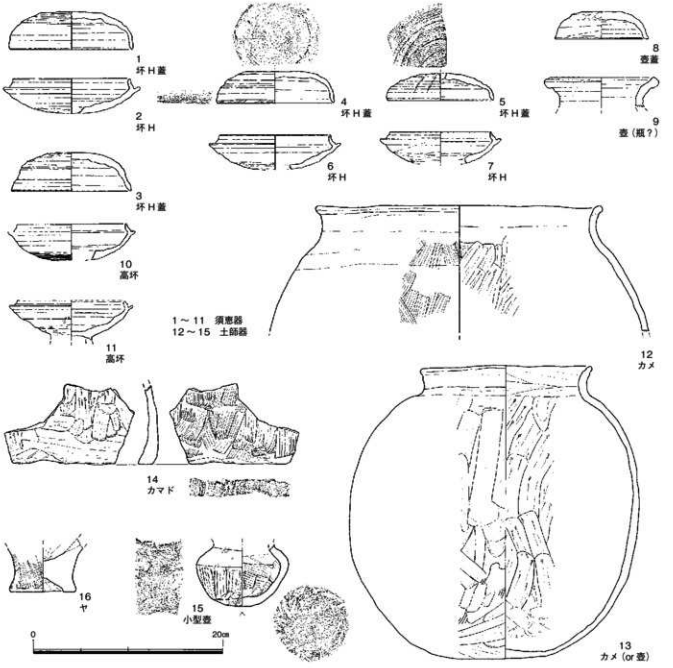


Fig.16　SK005出土土器（1）（1/4）

PL.5−1)、SD010に比べ遺物片があまり接合しない傾向にあり、図化できていないものも少なくない。**Fig.12−1**はほぼ完形で出土した（PL.5−1）須恵器杯身で、Ⅳ期前半のもの。**Fig.13−12**は古墳中期の甕か。**Fig.29−16～18**は古墳中期前半（重藤編年３Ａ期）の土器群。**19**も同様か。**15**の須恵器杯蓋はⅢＢ期～Ⅳ−１期。SD010と同様に古墳時代中期の土器が入るが、溝の時期はⅢＢ期～Ⅳ期前半であろう。ほぼ平行するSD014−091もⅣ期初頭と考えられることから、その推定が妥当であろう。

SD014・091（平面図はFig.4、土層図・断面図はFig.7、Ph.7･8、PL.1−2,5−7･8,6−1～3）

Ⅱ区北東側で検出した溝。両溝には切合があり（Ph.7）、SD014がSD091を切るが、同一線上に延びる溝で遺物の時期も大差ないことから、SD002～004と同様に一定の埋没が進行した後に、SD014に相当する部分がより深く掘り直しされたものと推察し、本来は同一の溝であったと考える。溝はN−87°−W前後の方位で走行する。SD011とほぼ平行する。溝幅は、SD014は120～150cm、SD091は90～135cmの遺存である。いずれも幅に比して浅く、削平により上部が不明だが、SD011と同様のゆるいU字形または箱形断面である。土層の観察と底面の様相から、何度か掘り直され、当初の溝幅より狭い逆台形ないしU字形となった時期があるようである。他の溝と同様に、底面に植物の生痕や流水の痕跡とみられる凹凸がある。井堰や杭列などは無かったが、水路としての機能が考えられよう。

出土遺物はSD010・011に比較して少なかった（図は**Fig.13−9～11,Fig.29−20**）。**9**は杯蓋だが、焼け歪みが著しい。形態的にⅢＢ期か。**10**（Fig.13）は短脚の高坏で、脚部透孔は３つある。うち２つの透孔は切り込みがあるが、抜き取られていない（PL.7−3･4）。坏部形態からⅢＢ期～Ⅳ−１期。**11**も短脚高坏だが、10より坏部径が小さく、透孔が無い。脚裾部は著しく屈曲し水平状になる。Ⅳ−２～３期。**Fig.29−20**は古墳中期前半、接合部充填法。**21**は甑だが、天地逆の可能性（内面ケズ

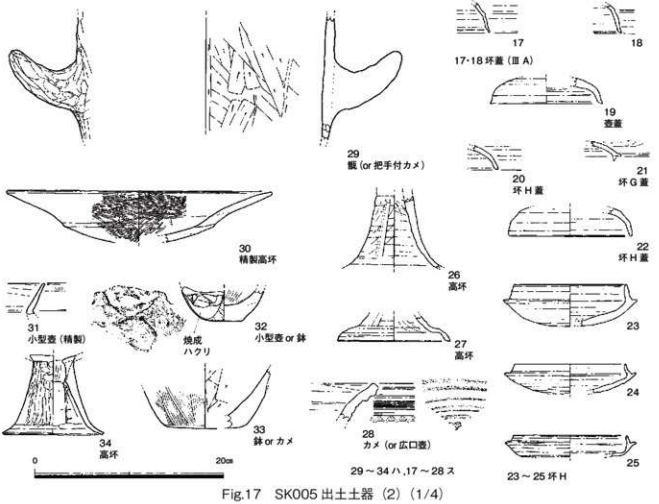


Fig.17　SK005出土土器（2）（1/4）

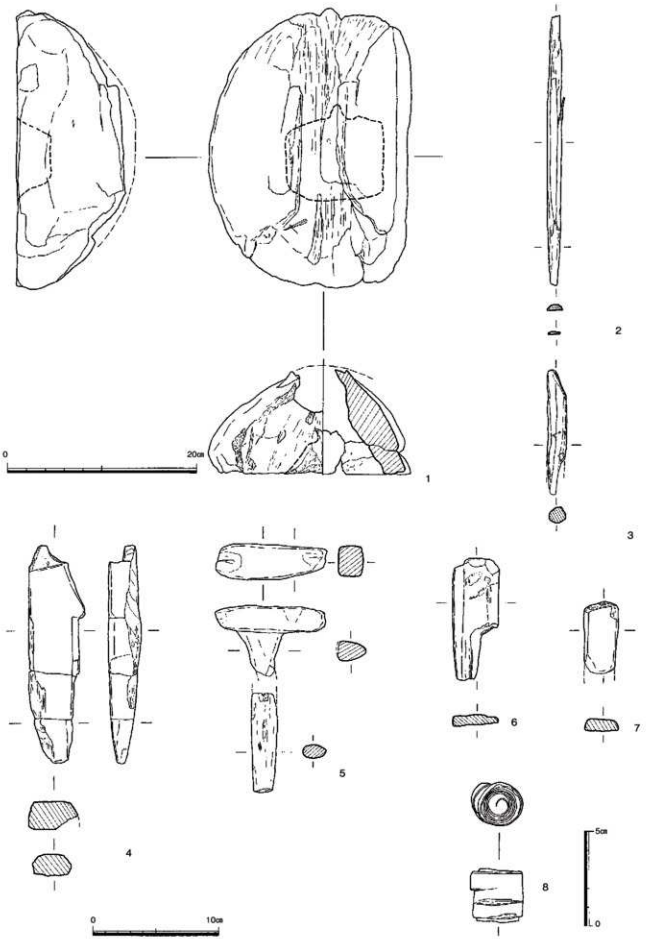


Fig.18　SK005 出土木製品（1/4、1/3、1/2）

リから図の天地とした)。以上、ⅢB期～Ⅳ期前半があり、方位や溝の特徴もSD011と類似し、同一時期であろう。

SD015・016（Fig.14）はⅠ区の北側東隅で検出した。SD015がSD016を切る。いずれも細く浅い溝だが、SD016の西端はピット状に深くなる。SD015はN−25°−W、SD016はN−80°−Eの方位。いずれも削平により残りが悪く、遺物もほとんど出土せず、方位も他の溝とは異なり、詳細な時期は不明。

（2）土坑

SK005・006（Fig.15、PL.2−1～3,PL.4−1･2,PL.5−3、表表紙写真）

Ⅰ区中央東側で検出した大型土坑。SK006をSK005が切ると認識した。**SK005**は、やや不整形な部分もあるが、2.0×3.0mの楕円形ないし隅丸長方形、**SK006**は径2.7m前後。SK005の深度は、

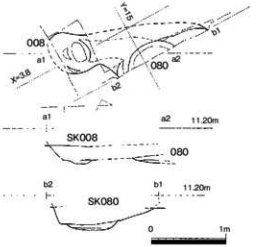


Fig.19　SK008・080実測図（1/50）

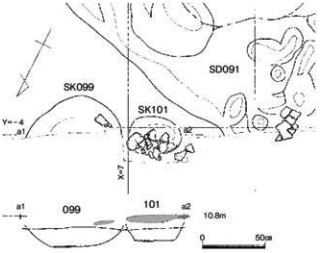


Fig.20　SK099・101,SD091遺物出土状況図（1/30）

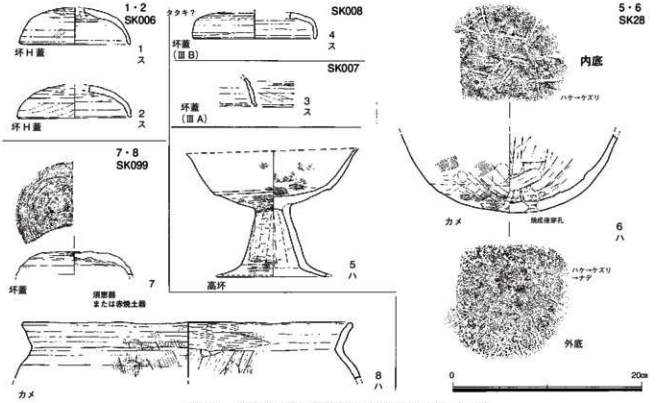


Fig.21　SK006・007・028・099出土土器（1/4）

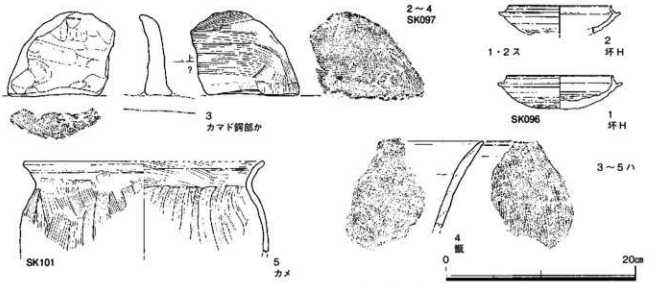


Fig.22　SK097・096・101 出土土器（1/4）

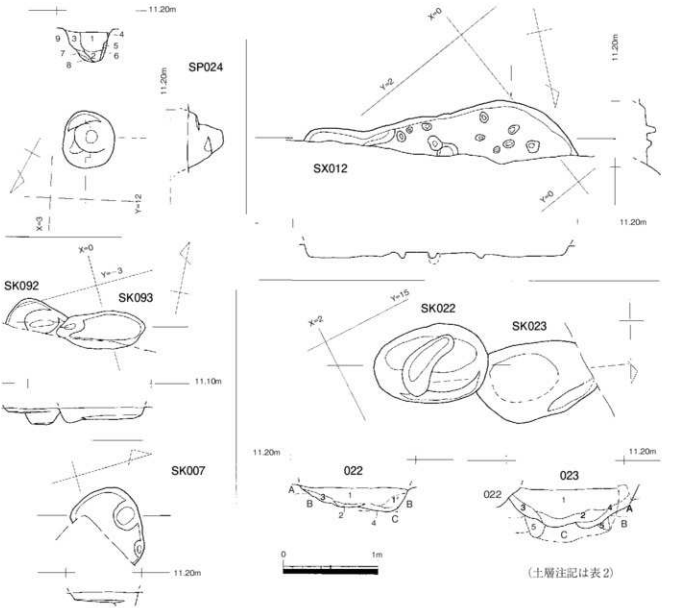


Fig.23　SP024,SX012,SK092・093,SK007,SK022・023 実測図（1/40）

検出面から 110cm 前後。土坑底面は西側がやや深くなる。上層では遺物が散漫に出土したが、中央部の中層下部以下、下層まで木製品と土器が一括して出土した。調査時には湧水は無かったが、木製品が残る埋土環境から、本来は湧水があった可能性が高い。土層を観察すると（Fig.15 下段）、土層の不整合から 1 ～ 2 回の大きな掘り直しが考えられる。遺物の一括出土層位は、ある時点の掘り直しの中層以下である（33･32･22 層を最下層とし、18・12・5 層を下層とする）。本来は湧水があったとすれば、井戸としての土坑であろう。当初掘方の土坑底面西側に凹みがあり、井戸側の位置を示す可能性がある。また上記の土坑中央やや西寄りの掘り直し最下層部は少し凹み、これも井戸側の位置を示すと考えられる。この想定が正しければ、遺物の一括廃棄は、井戸側抜き取り後の行為であろう。また、上層（1･2 層）も掘り直しの可能性があるが、浅いレベルのためこれは井戸ではないだろう。

出土遺物は多く、極力図化し掲載した（**Fig.16･17－1 ～ 34**）。**1 ～ 7・17･18・22 ～ 25** は坏Ｈの身と蓋。**17･18** はⅢＡ期に遡るが小片であり、他は**ⅢＢ期的な形態**のものが多い（**1 ～ 4,6,22･23**）。ただし、**5･7** のように口径がやや小さいものがあり、**5** は体部から口縁部に屈曲し新相型式であり、**24･25** の身は体部が浅い。口径も（杯身の場合は上に載る杯蓋の口径で考える）、ⅢＢ期にはある 14cm 前後のものが含まれない。出土状況の一括性は高く、口径や形態に新出要素があることから、**Ⅳ－1** 期のセットである。**28** は甕の口縁部に退化した波状文があり、Ⅳ期古相である。

Ph9.　SK101・099 遺跡出土状況（南東から）

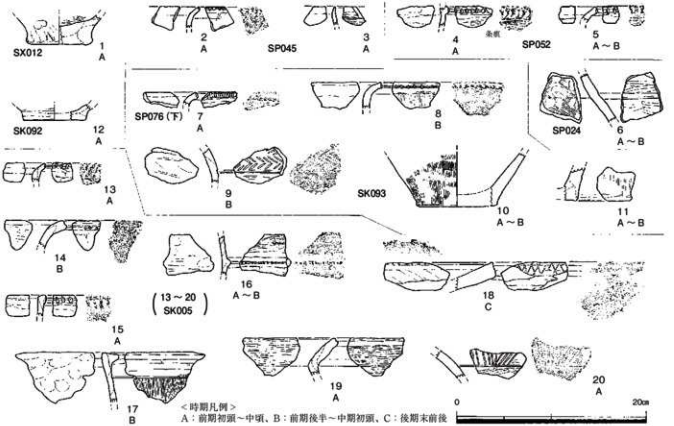


Fig.24　土坑・柱穴出土弥生土器（1/4）

10・**11** の高坏も、対応する蓋の口径は 13.0cm までであり、やはりⅣ期に下る。**8**・**19** は口径が小さく、杯蓋ではなく壺類の蓋。**26**・**27** の高坏脚部は 3 方向透孔であろう。ⅢB 期～Ⅳ期初頭で妥当。**21** は坏Gの蓋だが、坏GはⅣ−1 期には無い。畿内では飛鳥Ⅰ期からあるが、北部九州ではⅣ−2 期の牛頸小田浦 28 地点と惣利西 2 号住居が最古例であり、一般化はⅣ−3 期以降である。小片であり、上層からの混入か（「ベルト中層」と注記）。土師器では、**14** は移動式竈の一部、**12** は甕だが、**13** は胴部が丸く球状で、遺存は良好だが煤が付着せず壺であろう。**29** は直立気味体部で甑だが、把手付甕の可能性もある。**30** は赤橙色水流胎土の精製高坏で、暗文風ミガキがある。長めの脚柱状部が伴うもので、ⅢB 期前後にある。**32** の小型壺は焼成時破裂痕の剥離がある。**33** は小さめの底部で、甕よりは鉢状になる。**15** は粗製の小型丸底壺で、古墳中期前半。**31** の精製小型壺と **34** の高坏も同じ中期前半で、これらは混入品である。**16** は弥生中期初頭前後の甕底部。以上から、SK005 はⅣ−1 期に、（少なくとも「井戸」としては）廃棄されたと考えられる。**SK006** からは須恵器杯蓋片が出土した（**Fig.21**−**1**・**2**）。**1**・**2** ともに図の復元径は 12.0cm を切り新しくなるが、それだと切合による SK005（Ⅳ−1 期）との新旧に矛盾が生じる。1・2 ともに比較的小片で口縁部の残りが悪く、体部～天井部の稜線の円弧を見ると、一回り大きい可能性がある。径が大きくなれば形態的にⅢB 期となり、矛盾しない。

SK005 からは**木製品**などの有機質遺物も出土した。人為的加工が見られたものなどを図化した（**Fig.18**）。**1** は断面半球円ないし台形（側縁裾部に屈曲あり）、平面は復元円形（図の右側は剥離破損）の木製品。中央は、現状は上下に貫通し、内面下半は平面長方形で断面台形状の孔が刳り込まれている。さらに上半へ 35㎜幅程度の方形孔が貫通していた可能性もあるが、破損と剥離による表面の荒れのため不明で、下半の断面台形の刳り込みで終わっているようにも見える。木取りは上面が芯材。樹種は不明。類例から**笠形木製品**の可能性があり、その**未成品**か。ただし特に外形の特徴は 5 世紀後半～末のものに近く（鈴木裕明 2000「笠形木製品・石製品」『権威の象徴－古墳時代の威儀具－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、時期的に矛盾があり、建築材など別の器種かもしれない。検討を要する。**2** は棒状の不明品で、

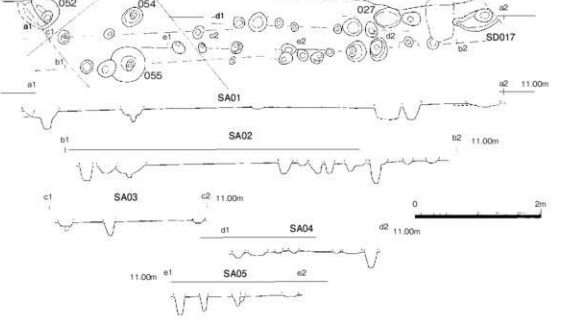


Fig.25　柵列 SA01 ～ 05 実測図（1/60）

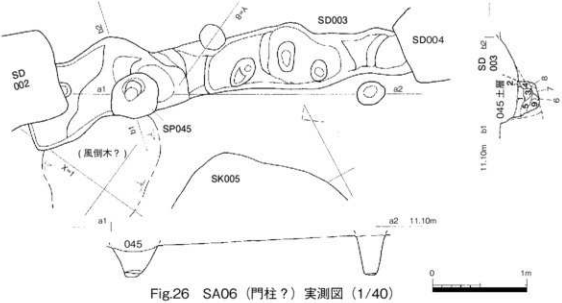


Fig.26　SA06（門柱？）実測図（1/40）

図下側先端は削って尖らせている可能性があり、断面も多角形状に加工したものか。**3** は図上側を斜めに切断し、2 と同様に断面多角形状に加工するか。**4** は鋤ないし鍬の農耕起具が縦に割れたもの（図左側）。アカガシ亜属か。**5** は手斧の柄。**6** は一部に浅い刳り込みと削りがある細板状。7 は農具を再加工した細板状。アカガシ亜属か。8 は樹皮を剥いで巻いたもの。延ばすと 48cm になる。

SK028（Fig.10、Ph.6、PL.5−2）は SD010 と SD011 の間で検出。両溝と SK020 に切られる。本来は竪穴住居の一部の可能性もある。上面で高坏などが出土。**Fig.21−5・6** は中期前半の高坏と甕。

SK008・080（Fig.19）は Ⅰ区南東隅で検出。排水用側溝を掘削したため一部を破壊してしまったが、本来は同一の土坑（溝か）であった可能性がある。**Fig.21−4** はⅢB期の杯蓋。天井部にタタキ痕跡。

SK099（Fig.20、Ph.8）はⅡ区北側壁際で検出。上面に土師器甕片が出土し（**Fig.21−8**）、下部は径 75cm 前後の土坑となる。**Fig.21−7** は赤焼気味の杯蓋で、天井部が平坦気味でⅡ期（MT15）に

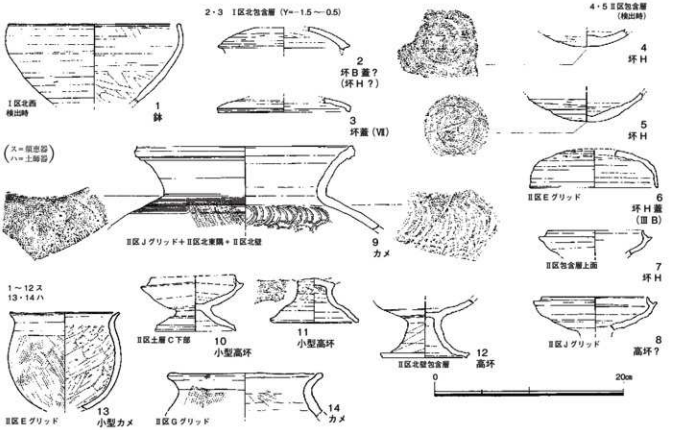


Fig.27　包含層出土土器（1）（1/4）

上るか。

SK101（Fig20、Ph8）はSK099の西側で検出した30 × 42cmの土坑。上面で土師器甕（**Fig.22－5**）が出土。SK099上面の土器と同レベルであり、両土坑は削平された竪穴住居内であった可能性もある。

SK007（Fig23左下）はⅠ区南側で検出。排水用側溝で一部を破壊してしまった。70 × 84cm前後の平面形で、非常に浅い遺存だが、一部ピット状になる。柱穴か。ⅢA期の坏蓋片が出土（**Fig.21－3**）。

SK022・023（PL.5－5）はⅠ区南側西で検出。いずれも80 × 120 ～ 130cmの楕円形。022が023を切ると見たが不明瞭。底面も地山との境が不明確だった。出土遺物は無い。風倒木などかもしれない。

SK096（Fig.11、PL.5－7・8）はⅡ区北側隅で検出。70 × 108cm前後の不整楕円形土坑。須恵器杯身（**Fig.22－1**）が上層で出土。対応する蓋は径12.4cm前後のもので、Ⅳ－2 ～ 3期。

SK097（Fig.11、PL.5－7・8）はSK096の南で検出。70 × 78cmの不整方形土坑。上層で土器が出土。**Fig.22－2**の杯身は径が小さく、Ⅳ期後半。**3**は移動式竈焚口上部の鍔部。**4**は甑片か。

SK093（Fig.23－左側中段、PL.5－4）はSD011－Ⅲ区の北側で検出。36 × 93cmの長楕円形。弥生前期土器のみが出土し、前期後半が主体である（**Fig.24－7 ～ 11**）。**SK092**は093に切られる。壺底部片は前期前半か（**Fig.24－12**）。**SX012**（Fig.23右上、PL.3－1中央）はSD010に切られる2.8 m長の土坑ないし竪穴。隅丸方形か。あるいは竪穴住居か。夜臼式系統の甕（深鉢）底部がある（**Fig.24－1**）。弥生前期初頭。柱穴**SP024**（Fig.23左上）は、丹後壺片が出土している（**Fig.24－6**）。弥生前期中頃か。

（3）柱穴列

SA01 ～ 05（Fig25、PL.3－1・2）は、SD010の南側で溝に沿って検出したピット列である。SP027のように柱痕を確認したものもあり、柱穴列＝柵列であろう。SD017の状況からは、本来は布堀状であったものが削平された可能性もありうる。これら柵列は同一時期ではなく、何度か作り替えられたものであろう。区画溝の内側に柵列や布堀溝があるものに首長居館（首長層居宅）があり、注目される。

SA06（Fig26）はSD003の南側で検出した。SP045はSD003の埋没後の掘り込みである。本来は一連だったSD002 ～ 004が一定の埋没後にSD002 004部分が掘り直しされたとすれば、SD003部分は陸橋状となる。すなわちSA006は屋敷地区画（首長層居宅？）内への「**門柱**」の可能性がある。

（4）包含層の出土遺物（Fig.27・28・30）

土師器・須恵器は**Fig.27・28**に、**弥生土器**は**Fig.30**に図示した。出土グリッドはFig.3参照。

Ⅰ区北包含層はSD011－Ⅰ・Ⅱ区、Ⅰ区北西検出時はSD010－Ⅱ区、EグリッドはSD011－Ⅰ区、

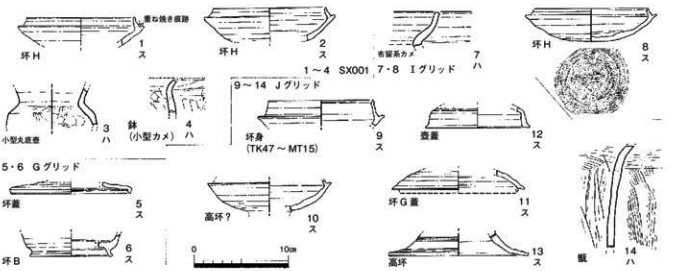


Fig.28 包含層出土土器（2）（1/4）

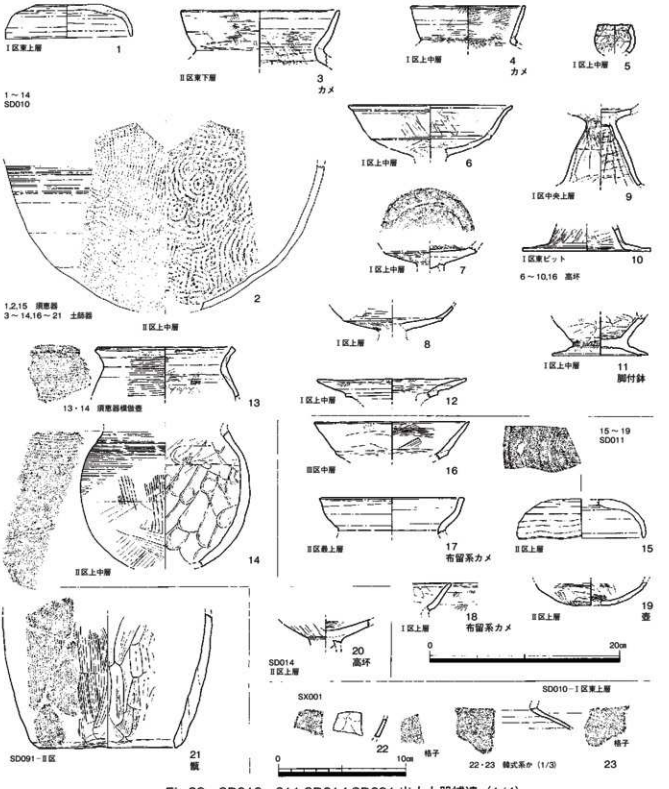


Fig.29　SD010・011,SD014,SD091 出土土器補遺（1/4）

GはSD011－Ⅲ・Ⅳ区、Ⅱ区北壁はSD091、JグリッドはSD014ないしSK096 097、IグリッドはSD014の各遺構上部に対応する可能性がある。**Fig.27－1**の鉢はⅤ期以降（Fig.13－1と同様）、**2**はケズリの範囲が広く蓋としたがあるいは杯身か（ⅢB期？）。**10**はⅣ期後半～Ⅴ期に下る型式。**Fig.28－5**はⅦ期（8世紀）、**6**はⅥ期（7世紀末）である。**11**の坏G蓋は最古型式。**3・7**は古墳中期前半。**弥生土器（Fig.30）**は、Fig.24凡例のようにA・B・Cの3時期がある。前期～中期初頭が多いが、後期末前後がある。

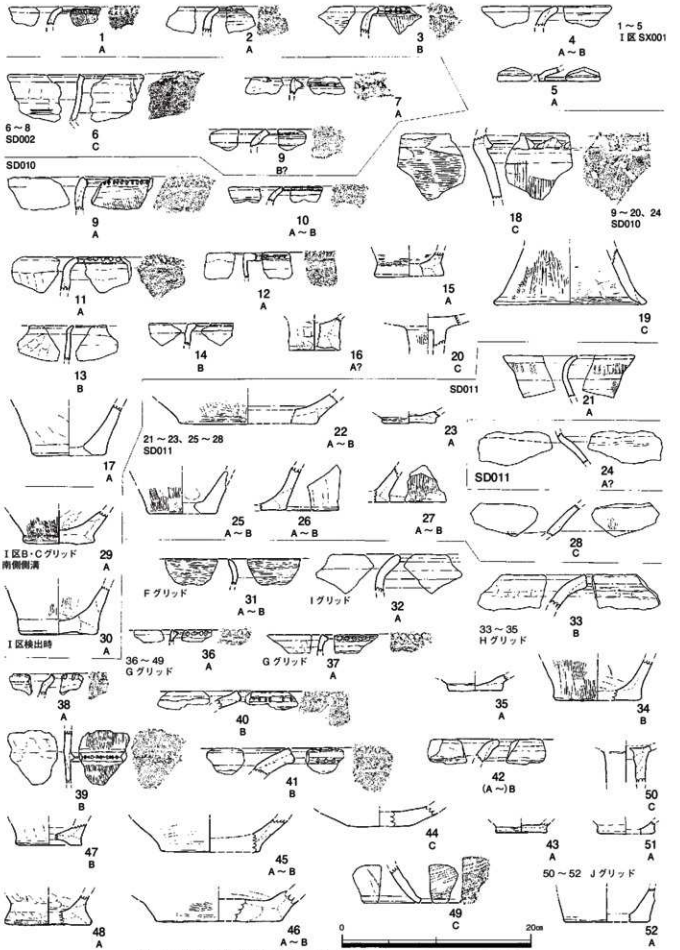


Fig.30 包含層ほか出土弥生土器 (1/4) ※A・B・Cは Fig.24 の凡例参照

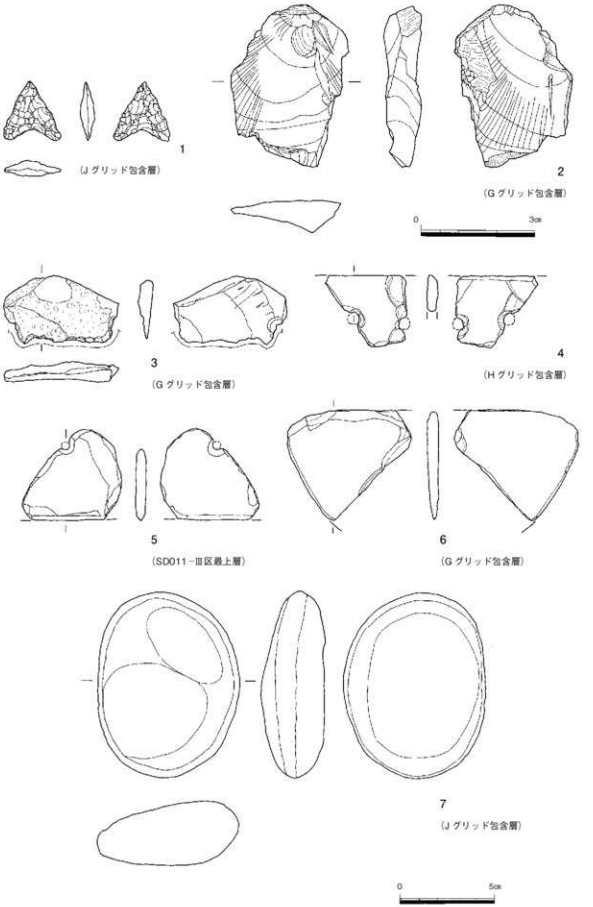


Fig.31 井相田C8次出土石器・石製品（1・2＝1/1, 3～7＝1/2）

(5) 石器 (Fig.31)

溝などの遺構覆土や包含層から主に弥生時代前半期の石器が出土している。プライマリーな出土状況のものはほとんどないが、弥生土器の時期傾向と同様に、前期初頭～中期初頭に属するものであろう。

(以下、**Fig.31**。出土遺構・グリッドは図中に記した。) **1**は黒曜石製の凹基正三角形石鏃で、最大長1.55cm・最大幅1.5cm・最大厚0.4cm・重量0.4gである。**2**は黒曜石製の剥片で、最大長4.2cm・最大幅3.1cm・最大厚1cm・重量9.6gである。その他に本調査で出土した黒曜石製石器は、小原石1点・残核15点・剥片44点・使用痕のある剥片9点がある。**2**は、出土黒曜石石器の中で最大のものであり、上下端に角礫面を残すことから、4～5cm程度の角礫から作出されたと想定できる。また、2のように打面調整を施さずに板状剥片を作出したものが目立つ。黒曜石は大半が光沢のある良質なもので、伊万里市腰岳近辺産と考えられるが、**1**の打製石鏃と残核1点についてはやや灰味・青味のある黒曜石である。以上より、本調査出土黒曜石石器群の特徴を整理すると、①1辺4～5cm程度の腰岳近辺産角礫黒曜石を素材とし、②打面調整を施さずに、③長さ3～4cm程度の板状剥片を目的的に作出する、という傾向を指摘できる。このような特徴から、本調査の剥片石器群の大半は弥生時代前期～中期初頭に属すると考えてよい。包含層などから出土する土器群と本来は伴うものであろう。

3はサヌカイト製の切削器で、長軸長6.1cm・短軸長3.5cm・最大厚0.9cm・重量17.8gである。下端を片面調整で刃部とし、刃先角は35～55°を測る。4～6は頁岩製石庖丁片で、いずれも表面の風化が著しい。**4**は現存長軸長4.3cm・現存短軸長3.7cm・最大厚0.6cm・現存重量12.1g・復元孔内径6～7mmである。**5**は現存長軸長5.2cm・現存短軸長4.7cm・最大厚0.5cm・現存重量17.4g・復元孔内径4mm・刃先角60°である。**6**は未成品片で、現存長軸長6.6cm・現存短軸長5.7cm・最大厚0.6cm・現存重量24g・刃先角57°である。**7**は花崗岩製磨石で、長軸長9.55cm・短軸長7.5cm・最大厚3.35cm・重量333.3gである。側縁全面に敲打痕が認められ、前面に2面、後面に1面の磨面が形成されている。

その他、硬質砂岩製砥石1点が出土しており(**Fig.32**)、最大長18.6cm・最大幅10cm・最大厚7.9cm・重量2541.2gである(SK005出土)。光沢をもつ肌理の細かい砥面が主として2つの面に形成されている。これは土坑の他の遺物からも6～7世紀の所産としてよいだろう。 (板倉 有大)

Fig.32 SK005出土砥石実測図(1/4)

Ⅲ. まとめ

井相田C8次では、主に古墳時代後期後半(ⅢB期)から飛鳥時代前半～中頃(Ⅳ・Ⅴ期)までの水路、区画溝、柵列、井戸、土坑を検出した。いずれの溝も覆土や底面の凹凸があることから流水があり、水路として使われた可能性もあるが、**SD010(Ⅳ～Ⅴ期)**と**SD002～004**(ⅢA～ⅢB期)は一義的には区画溝であろう。集落主要部は溝の南側である。SD010は西側で南へ屈曲して**方形区画**になる可能性がある。SD002～004の陸橋に**門柱**を想定した。SD010内側には**柵列**が伴い、**SK005**の様相から**有力階層の居宅の一部**とも考えられる。一方、より北側を走行する**SD011**や**SD014・091**(同時期、もしくは前者から後者へ移行か)は、集落縁辺部の区画溝であるとともに、北側に想定される水田の灌漑水路であろうか。周囲の3次・4次調査でも、ⅢB～Ⅳ期の方形指向の区画溝と建物(掘立・竪穴)と一部に井戸を伴う屋敷地が想定されている(Fig.2、3次報告参照)。有力階層の集落の展開が認められ、首長居宅を含む可能性がある。

1. 井相田 C8 次　Ⅰ区全景（南西から）

2. 井相田 C8 次　Ⅱ区全景（北東から）

3. Ⅰ区　北半調査状況（南西から）

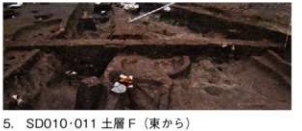
1. SK005 土層（東から）

2. SK005 中層遺物出土状況（東から）

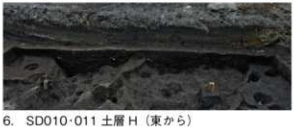
3. SK005 下層遺物出土状況（北東から）

4. SD010 北側遺物出土状況・土層 J（西から）

7. 18－1
（①～③）
笠形木製品？



5. SD010·011 土層 F（東から）



6. SD010·011 土層 H（東から）

8. 13－10

9. 13－10（坏部断面）

10. 16－3

・PL.2－7～10 は出土遺物写真、「18－1」などは、Fig. 番号に対応。

1.　Ⅰ区 SD011・010,SD002 ほか掘削状況（西から）

2.　Ⅰ区 SD011・010 掘削状況（北から）

PL.4

1. SK005 中層遺物出土状況（西から）

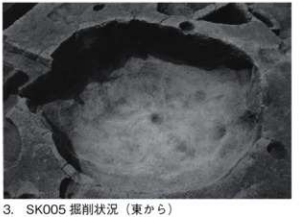
3. SK005 下層遺物出土状況（東から）

4. Ⅰ区 SD010・011 掘削状況（東から）

5. Ⅱ区全景（南西から）

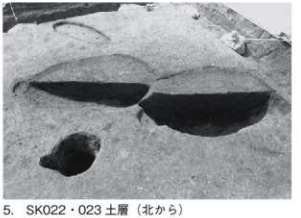
1. SD011－Ⅱ区掘削状況（東から）

2. SK028 遺物出土状況（北東から）



3. SK005 掘削状況（東から）

4. SK093 遺物出土状況（南から）



5. SK022・023 土層（北から）

6. SD011 土層 G（東から）

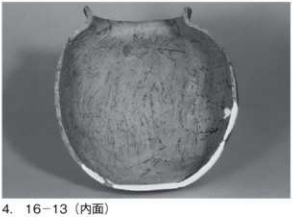
7. SD014・091,SK096・097・099・101
遺物出土状況（北西から）

8. SD014,SK096・097 遺物出土状況
（南西から）

1. SD014 遺物（13−10）出土状況（東から）

2. SD014 土層 L（西から）

3. SD091 土層 M（東から）



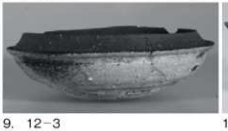
4. 16−13（内面）

5. 18−1（上面）

6. 18−1（側面）

7. 13−7

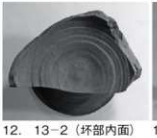
8. 12−1



9. 12−3

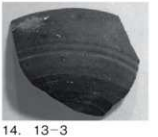
10. 13−11

11. 13−2



12. 13−2（坏部内面）

13. 13−5

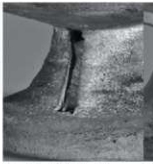


14. 13−3

・PL.6−4 以下は出土遺物写真．「16−13」などは、Fig. 番号に対応する。

1. 13−9 (1)

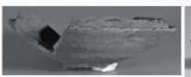
2. 13−9 (2)


3. 13−10透孔 (1)

4. 13−10透孔 (2)

5. 16−15

6. 16−15 (内底面)


7. 16−11

8. 16−7

9. 16−5

10. 16−7

11. 22−1

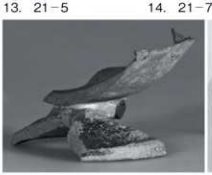
12. 16−4

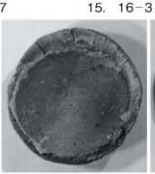
13. 21−5

14. 21−7

15. 16−3

16. 27−6

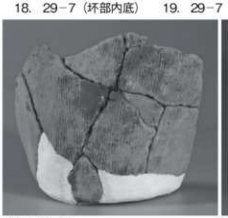

17. 27−10

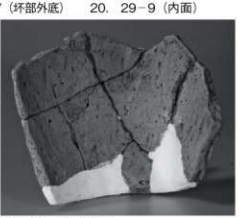

18. 29−7 (坏部内底)

19. 29−7 (坏部外底)

20. 29−9 (内面)

21. 29−14 (内面)


22. 29−21

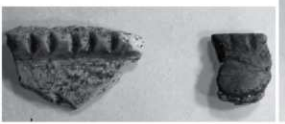

23. 29−21 (内面)

PL.8

1. 29−13・14

2. 27−9

4. 30−31


3. 24−5, 24−4

5. 24−6

6. 24−9

7. 24−20

8. 30・48

9. 30−21

10. 13−8

11. 18−8（上面）

12. 18−8（側面）

13. 18−7

14. 18−5

15. 18−4

16. 18−6

17. 18−2

報告書抄録

ふりがな	いそうだし−いせき7−いそうだし−いせきだい8じちょうさほうこく−
書名	井相田C遺跡7
副書名	−井相田C遺跡第8次調査報告−
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1027
編著者名	久住猛雄（編集・執筆）、板倉有大（石器）
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810−8621　福岡市中央区天神1丁目8−1　電話番号　092−711−4667
発行年月日	西暦2009年3月31日

遺跡名ふりがな	いそうだし−いせきだい8じちょうさ
遺跡名	井相田C遺跡第8次調査
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくいそうだ2ちょうめ17
遺跡所在地	福岡市博多区井相田2丁目17
市町村コード	40130
遺跡番号	2630
北緯　＜註＞	33° 33′ 22″
東経　＜註＞	130° 27′ 48″
調査期間	2007.04.16 ～ 2007.05.29
調査面積（㎡）	213.20㎡
調査原因	共同住宅建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代	<弥生時代>遺物包含層、土坑2＋竪穴住居？1 <古墳時代中期～後期・飛鳥時代> 遺物包含層、溝状遺構9＋大型土坑（井戸？）2＋土坑6＋ピット列（柵列？）5＋門柱状遺構？1ほか <時期不明> 溝状遺構2＋土坑2ほか	弥生土器（前期初頭～中期初頭、後期末前後）＋土師器（古墳時代中期～後期、飛鳥～奈良時代）＋須恵器＋木製品＋石器・石製品	古墳時代中期～後期・飛鳥時代前半期までの水路と区画溝、区画溝と柵列で囲まれた屋敷地（有力階層＝首長層居宅か？）、笠形木製品の可能性がある木製品、弥生時代前期の土器群と剥片石器群

＜註＞世界測地系による。

埋蔵文化財調査基本情報一覧表

遺跡名	井相田C遺跡	調査次数	8次	調査略号	ISC−8
調査番号	0703	分布地図図幅名	12. 麦野	遺跡登録番号	0202630
事前調査番号	18−2−947	調査原因	共同住宅建設	敷地面積	658.99㎡
調査期間	平成19年（2007年）4月16日～同年5月29日			申請工事面積	214.20㎡
調査地	福岡市博多区井相田2丁目2−17			調査面積	213.20㎡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1027集

井相田C遺跡7

—井相田C遺跡第8次調査報告—

2009年（平成21年）3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8−1

印刷　ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田3丁目9−32